



アーティスト

おじさんはペビーがジョージから黒子を描かれるシーンが好き。ここで彼女は一瞬ゾクッとするような表情をした。彼女が心だけでなく、すべてをジョー

ジからチャンスをもらい徐々に人気が出る。彼女は密かにジョージに心を寄せていた。

新入女優ペビーはオーディション会場で、大スターのジョージからチャンスをもらい徐々に人気が出る。彼女は密かにジョージに心を寄せていた。

白黒サイレントのフランス映画「アーティスト」が第84回アカデミー賞で作品賞など5冠を獲得した。

期待通りの満足と幸せな気分

ジョーに許した一瞬であり、女優としての成功のチャームポイントを与えられた瞬間でもあった。

彼女がジョージの楽屋でハンガーに架かった彼の上着に右手を通し、自分を抱きかかえる一人芝居のシーンも好きだ。

ここではなぜか、チャップリンの「黄金狂時代」のパンにフオークを刺し、テーブルの上で踊らせた名シーンを思い出した。映画会社の階段とフロアーのセットでは、「モダンタイムス」の歯車にチャップリンが巻き込まれていくシーンが浮かんだ。CGや3Dの映画全盛の時代に、モノクロ映画ということで、逆に新鮮な映像が記憶されることになった。

ちなみに、おじさんは監督も主役の二人も全く知りませんでした。

(絵と文・山下雄平)

シネマ気球

第32号 200円

シネマ気球©
編集兼発行人 関田孝正
〒270-0107
千葉県流山市西深井 339-2
TEL 04(7153)1533
FAX 04(7156)7122

N雄とN子のシネマ対談

『スノーホワイト』

(監督=ルパート・サンダース)

伝説を破った戦う
ヒロイン〈白雪姫〉

アグレッシブな白雪姫

N雄「400年も読まれているグリム童話『白雪姫』のイメージを完全に破ってるな。」

N子「想像を越えたアクションシーンも売りだよな。」

N雄「監督は、これは女性版(ヘルク・スカイウォーカー)だと言ってた。」

N子「それにしても、スノーホワイト(クリステン・スチュワート)が強すぎるよ。」

N雄「たしかに、これでは(ジャンヌ・ダルク)の再来と言っても仕方ない。」

N子「魔女ラヴェンナ(シャーリーズ・セロン)にずっと閉じ込められていたんだから、戦う訓練はしてないはずだよ。」

N雄「矛盾してるが、無理を承知で『戦う白雪姫』を狙ったんだろ。今の時代がね、そう要求してるのかもよ。」

N子「脱出した後に、戦い方を習ったってことか。」

N雄「とにかく、アグレッシブな白雪姫にはちがいない。」

N子「スノーホワイトが城を脱出し崖から必死で飛び降りるんだけど、その割には高くなかったけど。」

N雄「あそこは、もって絶壁の方が盛り上がる。CGでうまく処理できたはずだが。」

N子「彼女が迷い込む魔界(暗い森)や、真逆の明るい妖精が住む森(聖域)がよく描かれてたね。」

N雄「CMを作ってたという監督のビジュアルな資質が遺憾なく発揮されてる。」

N子「ナイキやトヨタのCMを手掛けてたそうだよ。」

N雄「独得の映像感覚を持つてるが、同じCM出身のリドリー・スコットに映像が似てると見た

が。」

N子「魔女の兵士が倒されると金属の破片に砕けちったり、矢を受けた鹿が小さな鳥に分散したり、見せるショットが多かったね。」

N雄「黒いマントがカラスの群れに変ったりな。技術に裏打ちされたイメージが豊富なんだよ。」

N子「全体的に新しい伝説を作り上げようとする気持ちが伝わってきた。今までは弱い主人公でも良かったが、現在は強くないと生きていけない。」

N雄「魔女を演じたセロンは、妖艶さと邪悪さをストレートにだしてた。」

N子「人物像に必然性があつたよね。ちよつと力がいりすぎたけどね。」

N雄「セロンは、ラヴェンナを永遠の美だけでなく、権力も得るため白雪姫を狙ったとして演じ切ったって。」

N子「それは成功してると思うけど。美貌だけでは単純すぎる。」

N雄「パワーが落ちて顔にしわが寄ったり、絶叫したり汚れ役をけっこう楽しんでたようだった。」

N子「他人になりすまして、怪し

げな魔術も使ってたね。」

N雄「それに負けずにスチュワートも、全身でスノーホワイト役に体当たり。」

N子「2人の演技合戦は見ものだったね。」

N雄「彼女はシャロンが出るので自分も出演を決めたらしいな。」

N子「映画の中では憎み合う2人だけど、プライベートでは認め合ってるようだね。」

ファンタジックな森のシーン

N雄「原作にある毒リンゴも森の小人たちもちゃんとでてきた。」

N子「小人の撮影は大変だったっ



『スノーホワイト』シャーリーズ・セロン

て。顔を差し替えたり俳優を縮小したりして。」

N雄「不自然な感じはしなかった。」

——小人と言えば、『ロード・オブ・ザ・リング』で有名だが。」

N子「彼らにはぜひとも、『ハイホー』って、歌ってほしかったね。」

N雄「期待したんだがなあ。でも脇役としてちゃんと活躍してた。」

N子「スノーホワイトが会出现森の妖精とか精霊がなかなかファンタジックだったね。」

N雄「あの立派な角を持った鹿は森の精霊なんだ。日本ではあまりぴんとこないが。」

N子「乱暴なトロールもでてくるが、彼女には手出しをしなかった。」

N雄「女王にだまされリングをか

じったスノーホワイトは、一見命を落としたかと思えたが、よみがえる。」

N子「原作では、王子のキスで生き返るんだけど、これは、狩人エリック（クリス・ヘムズワース）のキスで目を覚ますんだよね。」

N雄「時間差で生き返ってたな。」

N子「このエリックという役も、ストーリーのポインターになってた。」

N雄「だって魔女に白雪姫をつかまえて言われたのに、彼女の味方になる。」

N子「そこにドラマがあるんだよ。この後、スノーホワイトは彼らと、魔女に戦いを挑んでいく。」

平凡だった城攻め作戦

N雄「甲冑をつけて砂浜にある城での戦いは、ほんとにジャンヌ

治の病に侵されており、その話が平行して展開される。

靴みがきがなぜ密航少年を警察の手から救おうとするのか、説明が全然なされない。少年の祖父らに会いに難民キャンプにまで行き少年の送り先を聞き出す無償の行為。取り締まる刑事もまた善意の

・ダルクもどきになったた。」

N子「小人たちが忍び込んで城門をあける作戦があつたけど、うまくいくすぎだよね。もっと違う仕掛けがあると思ったが。」

N雄「あいつらはそんなに強くないし、門を守ってた敵の兵士も数が少なかった。」

N子「門をめぐる戦いの様子がよくわからなかったけど、的確に描いて欲しかったね。」

N雄「満ち潮になったら城には行けないから、もっとスリリングになったはず。」

N子「火球を飛ばしたりしてたけど、守る側も攻める側も作戦的には平凡だったね。」

N雄「女王が鏡に向かって世界一の美女は誰か？と尋ねると、鏡が溶け出して人間の姿になるショットにびっくり。」

N子「そのミラーマンに、スノー

ホワイトの心臓を手に入れば永遠の若さと美貌を手に行けると告げられる。」

N雄「結局、最後は2人の対決になるんだが。」

N子「スノーホワイトを助ける寝返りエリックが、かなり奮闘してたね。」

N雄「が、中途半端なロマンスにならなくてよかったよ。」

N子「つまりは、邪悪は滅びるって話だよ、これは。」

N雄「いままでは回りに守られていた姫が自分で戦いの先頭に立つ。かくして、新しい伝説が作られたわけだ。」

N子「21世紀の新しい『白雪姫』がね。」

*採点 N雄 (88点)

N子 (88点)

ル・アーヴルの靴みがき

ハッピーエンドこそ映画

靴みがきがアフリカからフランスに密航してきた少年をかくまひ、母親の暮らすイギリスへ逃がすまでが描かれる。靴みがきの妻は不

人なのだが、なぜかくも善意であるのか説明されない。しかし、これでよいのかもしれない。靴みがきの善意、刑事の善意にも説明しきれない物語があるのだろう。アキ・カウリスマキは、映画はハッピーエンドがすべてという気が製作の根底にあるにちがいない。

い。登場人物は、みんなハッピーエンドに向けて行動しているのだ。酒場の女マスター。パン屋の女店主、雑貨屋の夫婦。靴みがきの相棒のベトナム人。リトルボブという年老いたロック歌手と同年輩の美人の彼女。密航を手伝う船長。みんないい。(せ)

シネマ・ギャラリー 10

鶴田 聖



〔描き手からの蛇足〕シネマ・ギャラリーも10回を数え、今回はひとつ華やかに懐かしい洋画のセクシー女優をバーンと集めて…など軽い気持ちで始めはみたものの、ジャンル(?)は複雑にして人選は困難をきわめ、描き手の映画力の無さをあらためて痛感する結果となりました。こんな不才の徒ではありますが、今後ともよろしくお願い出来ればと思っております。10年目なのです。

右側上から縦に、ブリギット・ヘルム／ジーナ・ロロブリジダ／クラウディア・カルディナーレ。その横上から、ベティ・ブープ／ジーン・ハーロー／ソフィア・ローレン／ブリジット・バルドー。次、マレーネ・ディートリッヒ／マリリン・モンロー／モニカ・ビッティ。最後に左の5人上から、エスター・ウィリアムス／ジェーン・ラッセル／ジャンヌ・モロー／ラクウェル・ウェルチ／エバ・オーリン。

イラスト&エッセイ 映像とその周辺あれこれ

〈3〉

中田好美

一番くじ体験実録

狙うはリアルフィギュア

くじ引きというと、商店街や催し物で行われる、福引や三角くじなど、日常の微笑ましいひと時を想像されると思うのだが、この一番くじは私にとって戦いの場、1回500円という己の掛け金を投じて行う大きな賭けなのだ！

一番くじとは、バンプレストが全国のコンビニや書店などで販売しているくじ引きシリーズの総称である。一回500円のくじやプ

レミアムと呼ばれる一回600円、一回800円のくじも展開されている。このくじの特徴は、はずれがなく必ず何か当たるというものだ。

私が購入したのは、「一番くじ 夏目友人帳〜今宵は宴〜」

『夏目友人帳』とは、妖が見える少年夏目貴志と、妖との触れ合いを中心に描いた作品。この原作はアニメ化され、独特な雰囲気と切なくも温かいストーリーでファンの心を掴み、第4シリーズ（1シリーズ13話編成）まで放送されている人気の高い作品だ。

この作中で登場する、ニャンコ先生と呼ばれるキャラクターがとっても可愛いのだ。丸々と太った体に短い手足、食べる事とお酒を飲む事が大好きで、アニメで動きまわる姿を見ていると、そのぽっちゃりした体を抱きしめたくなるのであった。このニャンコ先生や作品のキャラクターが一番くじの商品として登場した。

各賞のアソート数は、A賞（ダブルフェイスクッション）2枚、B賞（夏目貴志リアルフィギュア）2枚、C賞（ニャンコ先生羽織ぬいぐるみ）3枚、D賞（オリジナルアートランプ）6枚、E

賞（ソックス）12枚、F賞（ケースアソート）17枚、G賞（ペン&ステーションナリーセット）18枚、H賞（ちびきゅんキャラ）20枚で総数は80枚となっている。

一番くじ発売前から、あの商品が当たったらここに飾ろう、などと想像して過ごすのがまた楽しい。宝くじでいう、億万長者になったら家を買おう、車を買おう、という抽選日までのワクワク期間と同じ感覚だ。

そして発売当日、一番くじの開催店舗に着く前から、「何が当たるかは自らの運次第」という思いに胸が高鳴る。ドキドキ、ワクワク、ソワソワ。くじ引きがここま

での緊張を生み出すとは思わなかった。

何気なく母がA賞引く

お店に着くと、すでにお客さんがくじを引いていて、商品棚からC賞の羽織ニャンコ先生がお待ち帰りされてゆく。焦りを感じ、急いで一番くじを購入。

私の欲しい商品は、B賞の夏目貴志リアルフィギュア。作中で妖に名を返す時に行う動作がそのまま立体化されたもので、高さは20センチと中々の迫力。肩にはニャンコ先生も乗っていて、ぽっちゃりボディも可愛く表現されている。彩色も造形も美しく、目の前に陳

夏目友人帳 一番くじ



列されたそのフィギュアを見て、
まずまず欲心に駆られるのであつた。

B賞の確率は80分の2。一回500円なので5回と決めてチャレンジする。

結果はC賞、D賞、G賞、H賞2種という中々のくじ運。C賞の羽織ニャンコ先生が当たり喜ぶものの、棚に陳列されたB賞の夏目貴志リアルフィギュアがこちらを見ていて(見ていない)どうしても諦められない。

CMで放送されていた、夏目貴志の優しい声が蘇る。「一番くじできみに会いたい」(私も会いたい!)

ここからは自分の欲望との葛藤だった。今日のくじ運は強い、次引いたら当たるかもしれない。そんな期待を胸にもう5回追加購入くじと対話するかのようには、

「あなたはB賞ですか?」と箱の中に入っているくじを一枚ずつ凝視して選ぶ。くじを捲る手が震え、鼓動は早くなり、緊張はピークに。一枚ずつ捲ると、F賞、H賞、E賞、E賞(この時点でかなり後悔)、そして最後一枚、E賞。自分のくじ運がおかしくて、つい吹き出してしまった。くじを選ん

でいる時の心情を家族に話したら、あまりにも凝視するからくじが避けたのだと笑われてしまった。欲を出した結果、3つ同じ商品を当てるという惨敗で終わることとなった。

悔しさが沸々とわき、落胆していた頃、母が4回引いてくれた。母は自分でくじを捲らず店員さんにお任せしたので、何賞が当たったのか分からないまま商品棚の前へ。

用意された袋が小さかった為、下位賞なのだと親子でげんなりしてしまった。3品袋に詰め終わつた後、店員さんが一番上に置かれたA賞を手取る。「えっ!!」と母と顔を合わせると、「大きくて袋に入らないので、このままお持ちください」と店員さん。いい年をして「やったく!!」と親子ではしゃいでしまった。

A賞のニャンコ先生ダブルフェイスクッションの大きさは、何と50センチ! もう嬉しくて、可愛くて、ニャンコ先生を車に運ぶ途中、人とすれ違う度に見られる、見られる。この視線が何とも堪らない、至福の時を過ごすのであつた。

部屋で当たった商品を眺めてい

ると、B賞以外を取り揃えた喜びはあるものの、最後のピースを無くしたパズルのように、B賞という空間が気になるのであつた。そしてその物足りない心は、時間が経つにつれ増してゆき、B賞への欲望が渦巻く事になるのであつた。冷静に考えれば80枚中2枚という確率でどのように引くのか。理解していても、欲しいと目覚めてしまった感情を抑えるには当てるしかない。

冷たくなる店員の視線

もやもやした気持ちを抱えたまま、翌日同じ店舗に行くことと完売御礼の文字が。諦めきれず近場の取り扱い店舗を回るが、跡形もない状態だった。どの店舗も即日完売というすごい人気。

欲望を保ったまま数日を過ごし、まだ販売されていないかったコンビニに問い合わせると、昨日から販売しているとのこと。

急いで店舗に行くと、B賞はすでに一本出ており、下位の賞はほとんど残っている。くじ運の強い人はいるものだと痛感した。

一縷の望みを胸に5回引く。

F賞、G賞、H賞、E賞、E賞、E賞。またしてもソックスを連続で当て

てしまった。もう今回の運では当てられないと思い、軽くなった財布を手を諦めることに。

同行してくれた母も、元々作品のファンなのだが、私のくじ引きをきっかけに、母の欲心にも火を付けてしまったのだ。

満々たる自信で母が4回引く。

C賞、D賞、E賞、F賞。

ここから母の独擅場。もう5回。F賞、H賞、H賞、G賞、A賞!

「A賞が出たならB賞も当たるはず!」

母のぎらついた眼に私は「もういいよ、当たらないよ」と抑制するも、更に5回。

E賞、G賞、H賞、H賞、A賞!? 嬉しいのに悲しいこの気持ちは何だろう。母の気が触れた姿を目の当たりにし、自身の欲望が冷えていった。

嘆息をもらす母、これで最後ともう5回。

E賞、G賞、G賞、F賞、E賞。

「もう帰ろう」

母に対応してくれた店員さんの表情は、今でも鮮明に覚えている。母がくじを買えば買うほど、店員さんの視線は冷たくなるのであつた。鼻息荒く、目を血走らせ、「次は当たるかも」と言い続けて

いた母の言動に、私は居た堪れない気持ちとなったのだ。この日の出来事は、一番くじにおいて忘れられない思い出となった。

欲に目が眩み、気が付けば母が19枚という、尋常ではない枚数を購入してしまった。くじを引いている最中は冷静さを失い、くじの確率なども忘れてしまう。80枚近いくじに1枚しかないという現実を、なぜ頭で理解出来ているのに引いてしまうのだろう。楽しめる領域を超えた時点で、その中毒性に気付くべきだった。

家に帰ると兄から一喝、「この馬鹿親子！」

本当にその通りだと、ダブった商品を見つめながら内省し、一番くじを引く時のルールを作る事に。回数を決めたら、欲しい賞が当たらなくても諦めること。これが一番重要で一番難しい。

分かっていてもやめられない

この一番くじの結末は、ダブってしまった商品をオークションに出品し、散財してしまった分を取り戻すという、何とも面倒な取引で事なきを得るのであった。

結局当てられなかったB賞は、オークションで入手することにな

った。なぜ最初からオークションにしないのかというと、それはくじである限り、自らの手で引き当りたいと熱望するからである。

一番くじの魅力は、くじでしか手に入らないという希少性と、上位賞になるほどその商品価値が高くなることだ。商品によってコストが違うのは明らかであり、少ない枚数で上位賞が当たれば正に快感。逆に何枚買っても下位賞のオンパレードとなれば、上位賞を当てる誰かの為に、その確率を下げてしまったと不満になるのであった。

一番くじで人気のある作品は、売れ行きによって何シリーズも発売される。しかし、シリーズ毎に魅力的なコンテンツ、というわけでもないのだ。最近の傾向としては、アソート総数を100枚に増やし、上位賞を2枚から1枚に減らし、下位賞を増やすという、あからさまな儲け主義へと変わってしまった。くじを引く側にとって、アソート数は確率であり、可能性である。この可能性を極端に下げるといえるのは、購入者の興味が削がれ、不買へと繋がってしまう。嘆かわしい事にそういったくじ程、実用性、オリジナリティーの

ないコンテンツとなり、作り手の手抜き感が否めないのだ。テンプレート化した下位賞は山となり(絵柄を使い回したクリアファイナルなど)、キャラクターの魅力が表現されていないフィギュアなどが上位賞に鎮座するのであった。魅力的なコンテンツに込められていた、熱情の再来を期待したい。

まあ、こんな事を書いてはいるが、結局好きな作品のくじは引いてみたくなるのである。



「トイ・ストーリー3」

感動の余韻に浸れる作品

おもちゃに命があり、自らの意思で動いていたら。

「トイ・ストーリー」の一作目を観たのは、小学生の時だった。作中でおもちゃ達が動き回る姿を観た時は、驚くと同時に、とても興奮した。

命を与えられたおもちゃ達は、表情も豊かで、その振る舞いに自

然と感情移入し、おもちゃ達と同じ表情になって観ていた。

目は心の窓というが、正にその通りだなと思うのである。

「トイ・ストーリー」を観た後、部屋でおもちゃやぬいぐるみを並べ、いつ動くのだろうと、じつと観察していた。おもちゃ達が動く事はなかったが、その日の夢の中で、とても楽しい時間を過ごす事が出来た。ぬいぐるみの背中に乗り、空を飛んだり、話をしたり。

魅力的なこの作品は、子供心に幸福をもたらし、おもちゃという存在を脳裏に刻み込むのであった。

「トイ・ストーリー」から15年経て作られた、「トイ・ストーリー3」では、製作に掛かった年月と、作中の時間軸が同じように流れ、その時間の流れを最大限に活用した脚本となっている。

最終章となる今作のテーマは、17歳へと成長した持ち主アンディの「おもちゃ離れ」

カウボーイ人形のウッディを軸にして物語は展開し、おもちゃの視点ならではの繊細な表現で描いている。

アンディは、大学への進学を機に、家を出る事となった。遊んでもらえないまでも、ずっと一緒に



いられると思っていたウッディ達は、慌てふためき、自分達の行く末について懸命に考え行動している。

この作品の見どころは、様々な要素を持ち合わせた演出である。おもちゃが武力行使をする、シリアスなシーンもあれば、バービー人形とケン人形のコメディタッチな恋模様も描かれる。

この二人のやりとりがとても愉快で、本来の性格を知らなかった私は、恋する乙女、バービーの雄々しい行動力と、ハンサムボーイ、ケンの女々しい振る舞いに大笑いしてしまった。人形特有のぎこちない動きが可愛らしく、また笑ってしまうのであった。

そんな中でもアクションパートとなる、ウッディ達の大脱出劇は、スリル満点で、ありとあらゆる刑務所映画を観て作り込んだという演出は、固唾を飲んで見守る事となる。

今作では、おもちゃの存在意義について掘り下げられ、人とおもちゃの境界が見えてくる。子供が親を選べないように、おもちゃもまた、持ち主を選ぶ事は出来ない。登場するおもちゃ達は、人生行路もとい、おもちゃ行路をそれぞれ

れ生きている。楽しいだけではなく、悲しい闇の部分。

特に印象強く残ったのが、ロッツォ・ハグベアというキャラクターの切ない過去の物語。

持ち主の女の子デ이지は、数あるおもちゃの中でもロッツォ・ハグベアが大のお気に入り。寝る時も食べる時もいつも傍らに置いている。

そんな大好きなおもちゃだからこそ、起きてしまった悲運。

それは、持ち歩いていたおもちゃ達を、手違いで置き去りにしてしまうというもの。取り残されたロッツォ達の、寂しい後ろ姿が目には焼きついて離れない。

不安や寂しさを抱えながらも、ロッツォ達は大切なデ이지の元へ帰ろうとする。

激しい雨が体を叩き、強い風に阻まれても、逢いたいという一途な想いで、只管懸命に歩く。

泥だらけになりながら、やつとの思いで彼女の家へと辿り着くと、そこに居たのは、新しく買われたロッツォ・ハグベアだった。

この瞬間からロッツォは人間への不信を抱き、その悲しみに閉ざされた心は歪んでしまうのである。人間から見れば、大量生産され

たどれも同じぬいぐるみかもしれない。でもぬいぐるみにとつては、大切な持ち主で代わりなどいないという事。

自身もかつて無くしてしまっただけのおもちゃを買ってもらい、満足していた事を思い出してしまった。

子供の頃は、無くした悲しみが大きく、そのおもちゃが全く同じようで、全く違うということに、気付かなかつたのだ。同じものが違ふと感ずるようになったのは、大人になってからだ。

誰かを想いながら何かを選ぶ時、

道—白磁の人—

異民族間の諍いを超えて

戦前の日韓併合下の朝鮮における日本人と朝鮮人の友情物語。高橋伴明監督は、前作「BOX 袴田事件・命とは」に続いていい映画を撮った。未見だがその前の「禅ZEN」と併せて、地味ながら良心的な映画製作で気を吐いている。

朝鮮松の養苗に取り組む日本人と朝鮮人、そしてその家族の物語。大自然のなかの一本の木の美しさを映像で捉えるところから始まる。

その気持ちはその瞬間にしか訪れないもの。対象物との思い出が深ければ深いほど、思い入れは強く、その存在を唯一無二のものへと変えてゆくのではないかと思つたのだ。

友人からの手紙や贈り物は、今でも傍に置いてあり、読む度、触れる度に、その人との思い出や、受け取った時の喜びが思い起こされる。そこにあるのは、単なるものではなく、思い出や感情の込められた、掛け替えのない宝物である。

「トイ・ストーリー3」を通じて物に対する考え方が変わり、身の回りにある全ての物に、何かしらの意義があるのではないかと感じさせてくれた。物を見るとその工程を想像し、どんな人が、どんな思いで作っているのだろうかと考えたりするのである。

突き詰めれば切りがないのだが、物に人が関わり、そこに何かしらの感情があるとすると、物へ対する興味がわき、その距離が縮まるのである。

掛け替えのない時間を共に過ご

朝鮮の林業試験場で働く浅川巧(吉沢悠)と先輩の朝鮮人・李青林(ベ・スビン)。日本統治下の朝鮮で独立運動が起こるなか、民族同士の対立を越えて浅川は朝鮮人と対等たんとする。李も浅川には協力を惜しまない。李の兄は運動の最中官憲に銃殺され、息子は独立運動に。李は息子の身代わりに刑務所に入れられる。浅川は体を壊して40歳の若さで亡くなる。終戦を迎え、日本人は朝鮮人から恨みを買って暴力を振るわれるが、浅川の家族はそれを免れる。

浅川の家族はそれを免れる。浅川の病弱な妻は、朝鮮の伝統的な陶器、白磁の破片を大事にと

つておく。それは夫を守るためのお守りだ。妻は余命幾ばくもないと悟り、娘にそれを託す。娘はそれをまた継母に譲る。異国の地、それも被支配者の地で自らの志を全うしようと奮闘する男を守ろうとする女たち。

母親が幼い娘にそのお守りを渡すシーンはきれいだ。夕日を浴びた山を背景にどこかのお寺。そのシーンがパンすると浅川の故郷、山梨の風景に。異国同士でも、民族的な対立があつても自然はつながっているというメッセージだろう。

(T・S)



『道—白磁の人—』

した、アンディとおもちゃ達の最後の物語。

作中で、アンディとおもちゃが直接会話をすることは無い。けれども、心が通じ合う事で生まれた、最高のエンディングは、愛に満ち溢れ、自然と涙がこぼれるのであった。

「ああ、観て良かったなあ」と感動の余韻に浸れる素晴らしい作品である。

聖職者と犯罪者の邂逅

『ヤコブへの手紙』

堀江広子

例えば、今の日本映画界に、お寺の住職と罪を犯した人間を対面させるような重いテーマで作品を作る気概があるだろうか。もし、あったとしてどのような作品になり得るのだろうかと考えてしまった。

一般的には、観光としてのお寺詣りに熱心な人も、お寺とのつきあいといえば葬儀、法事の際にお世話になる程度ではないだろうか。しかもそれはもっぱら形式的必要からと戒名や永代供養料などの経済面のつながりが主で、内面的なつながりは殆どないと言っても言い過ぎではないだろうか。日常の

中に信仰というものが深いつながりをもって存在していると思える人々がどのくらいいるだろう。

筆者は若い時分に、キリスト教に関心を持ち、クリスチャンである友人の紹介でカトリック教会で週に一度行われている聖書勉強会に通った事がある。通い始めて二年後に神父さんから洗礼を受けてもよいと勧められたが、決心がつかず、結局クリスチャンにはならなかった。そんな訳でキリスト教には特別な思いがある。

この作品は、キリスト教を通して、人が人として生きていく力となるものを静かに示してくれているように思う。

ミレーの風景画を想起

フィンランドは国民の大多数がカトリックではなく、ルター派のプロテスタントであるらしい。従って教会の聖職者は神父さんではなくて、牧師さんだ。近年は、国民の信仰心が低下傾向にあるようだ。

主な登場人物は三人である。バスもたまにしか来ない片田舎の古い牧師館（ミレーの風景画のような）で黙々と神に仕える年老いた盲目の牧師ヤコブ、彼の生き

甲斐は、さまざまな悩みを抱えた人々からの手紙を人に読んでもらい、返事を書くこと。

夫のDVに苦勞している姉を見かねて義兄を殺害し、終身刑に服していたレイラは特赦で出所した頑強な体つきの中年女性である。毎日牧師館に手紙を配達している郵便配達人は、レイラに対して不審な気持ちを抱いているようだ。

牧師館で手紙の代読をする仕事に就いたレイラだったが、ヤコブの行いが面倒くさく思えて仕方がない。ヤコブの目が見えないのいいことに配達された手紙を井戸に放り込んだり、あぐくヤコブを近くの教会に置き去りにしてお金を盗み逃げ出そうとして、ふつと気持ちが変わりいつそ首つりして死んでしまおうとするなど気持ちが悪く着かない。

ヤコブは、軽い認知症の症状が出ているのか、頼まれてもいない結婚式の準備に少し離れた教会へ出かける。待てど暮らせど誰も来ない。失意のあまり教会の床に寝転がる。もう自分など誰も必要としてくれない、神にも見放されたような気持ちになってしまったようだ。このまま死んでしまっても良いとさえ思ったのだろうか。



『ヤコブへの手紙』

だが、この後のしばしの沈黙の映像シーンは、まるでレンブラントの絵のように印象深い。仰向けのヤコブの額に、天井から雨漏りしている雨粒一滴がポツンと落ちる。その冷たさにヤコブは目覚め正気に戻る。

だが、それ以後ヤコブはすっかりふさぎ込み、シャツとももひきのような格好でよれよれの老人になつてしまふ。やがて手紙も来ない目が続く、見かねたレイラは、作り話をヤコブに聞かせるのだ。

だが、作り話もそうそう出来るわけもなく、レイラはどうとう自身のことを話し出す。

ここからが圧巻である。聖職者と罪を犯した人間との間に流れる奇跡のような美しい時間にまるで我々が立ち会っているかのような

謎めいた郵便配達人

だが、この作品はそんな美しい話だけではない何か、も織り込ま

2012アクション映画日誌

流 漂 介

1/8「パーフェクト・センス」(デヴィッド・マッケンジー) 感染症らしきものによって人間の五感が次々に失われていく。ユアン・マクレガーはレストランのコック。エヴァ・グリーンは感染学者。ウイルスによる脅威は常に映画になる。やはり目に見えない恐怖があり、人類が倒れるときはウイルスによるのかもしれないという恐怖感がある。★★★
1/8「哀しき獣」(ナ・ホンジン) 「チエイサー」の監督。追っかけシンはスリルがあつてうまい。これだけでも見る価値がある。中国とロシアに接するところに住んでいる朝鮮系中国人の存在をクローズアップ。朝鮮族の殺し屋の親玉、殺しを請け負った朝鮮族、韓国のヤクザらが三つ巴で殺しあう。★★★
1/9「宇宙人ポール」(グレッグ・モットーラ) 面白い。SFオタク二人組が本物の宇宙人の逃走に手を貸す。UFOが1947年に地球に墜落。

れている。郵便配達人の人物像は謎めいている。元終身刑のレイラを怖がっているかと思えば、真夜中、牧師館に忍び込んで来たりする。一体何のために? ヤコブの身を案じてなのか、お金を盗みに来たのか、レイラを襲いに来たのか。

以来、宇宙人はアメリカ政府に監禁され情報提供を続けてきたが……宇宙人が人間扱いのいい。顔かたちは宇宙人だが、煙草を吸ったり、しぐさが人間だ。長い地球生活でそうなったのか。追っかけのアクションもなかなかいい。宇宙人を最初に助けた女の子もい年になっている。ブライス・ダンナー(グイネス・パルトロー)の母が演じている。★★★
1/14「マイウェイ 12,000キロの真実」(カン・ジェギョ) 戦時中、運命のいたずらで日本軍、ソ連軍、ドイツ軍の軍人として戦わざるを得なかった、幼馴染でもあったマラソンランナーのライバルでもあった日本人(オダギリ・ジョー)と朝鮮人(チャン・ドンゴン)の反目と友情の物語。戦闘シーンは「ブラザーフッド」で証明済みだが、迫力のある映像を展開している。★★★
2/11「ドラゴン・タトゥーの女」(デヴィッド・フィンチャー) 西洋版横溝正史か。タイトルデザイン、テーマ曲が物語のミステリー性、サスペンスを暗示していてよかった。事件の核心に迫るのにインターネットがかなり有力な道具になっている。

いくら考えても分からないままだ。どのように考えるのか観る者が試されているような気もする。

この謎めいたエピソードが、キリスト教賛美になりがちなこの映画をびりっと引き締めたと思う。

クラウス・ハロ監督、二〇〇九年に作られた七十五分間の小品で

足で事件を解決する時代は遠のいた感がある。★★★

2/17「メランコリア」(ラース・フォン・トリア) 映画は冒頭、惑星と地球の衝突シーンを描く。ラストシーンの映像に迫力。ゴルフ場のある豪邸で、キルスティン・ダンストの結婚披露パーティーが開かれる。彼女は結婚初夜を迎えず、男と別れてしまう。衝突の前、夜に輝く二つの月が幻想的。★★★
2/17「TIME/タイム」(アンドリュー・ニコル)「ガタカ」の監督。時がお金の代わりに重宝される未来SFもの。人間の寿命は25歳で、それ以上は歳をとらない。貧しいものは労働の対価で時間を与えられ、それで命をつなぐ暮らしをしている。富裕層は時間を豊富に保有しており、その後無限に生きていく。主人公は金持ちの娘と時間泥棒となり、貧しいものの延命をはかる革命を起こす。ボニーとクライドのような雰囲気。ラストにはかもしだす。格差社会、富裕層への反感などが映画の根底にある。★★★
3/3「戦火の馬」(ステイブン・スピルバーグ) 少年と馬の数奇な運

ある。

フィンランド映画では、アキ・カウリスマキ監督の作品も見逃せない。いずれも寡黙な映画だが、もう若くない自分にはデンポが合うなあと思う。

命を描く。デイズニーの動物映画が監督の意識にあるだろう。スピルバーグ流動物映画。馬の躍動感はすばらしい。ラスト近く、イギリス軍とドイツ軍が戦う戦場(第一次世界大戦)を走り抜けるさまは圧巻。騎馬戦というのか、馬にまたがって集団で敵陣に突っ込む様は迫力満点。見せどころを心得ているし、それを実際に映像で見せてしまう力。イギリス軍がドイツ軍の陣地を攻める肉弾戦もなかなか見せる。★★★
3/10「シャドーロック・ホームズ シャドウゲーム」(ガイ・リッチ) 映像の処理、カメラ・美術がいい。アクションもカットを短くしないで見せると、面白さが伝わるのだが。話の展開は少しわかりにくい。ヒロインのノオミ・ラパス(「ミレニアム」のリスベット役)に魅力あり。★★★
3/20「青い塩」(イ・ヒョンスン) やくざメルヘン。次期親分格のやくざ(ソン・ガンホ)が内部抗争から命を狙われる(敵対するやくざ組織も絡んでいるようだが、話がわかりにくい)。狙うは元射撃選手の女殺し屋。★★★

追悼・新藤兼人

小泉 敦／今市文明

旺盛な創作意欲

小泉 敦

母と観た初期の作品

今年の5月29日新藤兼人が亡くなった。ちょうど100歳だった。最晩年は車椅子で撮影している様子が映像で流されたりもした。これだけのキャリアを積んできた監督でも最後まで創作意欲が衰えるということはなく、亡くなる直前まで作品を創りつづけた。すごいエネルギーを持った監督であった。黒澤の88歳をはるかに上回る高齢である。

生涯現役のまま映画監督をつづ

けたひととはたくさんいたが、ここまで高齢の現役映画監督というひとはそんなにいないだろう。わが国でもおそらくトップクラスではないか。映画監督というのは、職業として見た場合かなり神経をすり減らす仕事である。他の職業に比較すればむしろ短命のひとつが多い。巨匠と云われつづけた小津安二郎だって60歳で死んでいる。いまの時代を考えれば60歳はかなり若いと云える。

監督デビュー作の『愛妻物語』（1951）をつくったのが新藤39歳のとき。当時7歳だったわたしにこれを観るわけがない。しかしその2年後に公開される『縮図』（1953）や『どぶ』（1954）『狼』（1955）などの新藤作品はなぜか観ているのである。おそらく映画好きの母と一緒に観に連れて行ってくれたのだと思う。しかし子供のわたしにそれらの映画を理解するのはまったく不可能で、新藤作品は当時の印象としては甚だよくないものであった。なしる映画は明るい東映にかぎるなどと思っていたからである。そ

の東映映画に較べるとあまりに重くそして暗い。おまけに内容がさっぱり理解できないときては観ている間は地獄の責苦であった。『愛妻物語』を観て感動したのはその後成人してからである。

裕次郎映画『海の野郎ども』

しかしわたしの中で新藤兼人の名が初めて刻印されるようになったのは『海の野郎ども』（1957）からである。同じ年に作られた『嵐を呼ぶ男』の爆発的ヒットで、石原裕次郎は一夜にして全国区のスターとなった。その前年に作られた『乳母車』や『狂った果実』は新人スターとして石原裕次郎は注目されはしたが、日本全国裕次郎一色とはまだいかなかった。それが『嵐を呼ぶ男』一作でその後の邦画各社の勢力分布図が大きく変わってしまったのである。別に大きな宣伝をしたわけでもなく、だいたいこの頃の日活は傾きかかっていたのである。裕次郎ブームは云うならば、万年最下位の烙印を押されつづけていたプロ野球球団が、なんの選手の補強もないま

ま、ペナントレースに突入し若い無名の選手だけであれよあれよという間に優勝してしまったというような現象が現実には起きたということに似ている。まさにミラクルメッツである。

また同年には『勝利者』『俺は待つてゐるぜ』『鷲と鷹』など裕次郎の魅力を全開させた佳作が多かった。わたしはこの時代の裕次郎映画がいちばん好きなのである。翌年には『錆びたナイフ』や『夜の牙』などもある。そんな時代の中作られた『海の野郎ども』は裕次郎の映画としてはかなり異色の作品である。新藤が書いたこの映画の脚本は支配するものと被支配者の関係が明確に描かれていて、裕次郎は最初支配者側の人間として登場するが、最後には労働者たちの側に立って会社と対立してしまふことになる。そして悲しい結末を迎えることになる。そんな主人公を裕次郎は好演した。

古くならない『裸の島』

1959年と60年は新藤兼人の名を一躍有名にした作品が登場

する。『第五福竜丸』と『裸の島』である。とくに後者は世界各国で評判を呼び国際的な賞をいくつも獲っている。この作品は今日観ても新鮮な衝撃がある。テーマの普遍性が言語の違う国であつてもまったく関係なく受け入れられたということはこの時代ではとても大きい。またセリフやナレーションを排し、字幕もほんのわずかしを入れていない。余計な説明を徹底的に排除したことがこの映画では成功した。その代わりに林光が作曲したテーマが、この島で暮らす夫婦が急斜面を切り拓いて作ったわずかばかりの段々畑に水を撒くその苛酷な労働を見事に浮かび上がらせていく。この後100年経って観てもこの映画は古くならないだろう。すばらしい映画としか云いようがない。

病妻との4年の結婚生活

『青春のモノクローム』（1988／朝日新聞社刊）という新藤兼人の著作がある。本文430頁ほどのものだが、その内容は彼が22歳のとき初めて足を踏み入れた映画の世界、それは太秦映画村に職を求めてやって来たのがその理由であつた。本書はそこから書き始

められている。昭和9年（1934）のことであつた。新藤の最初の妻となる久慈孝子は『愛妻物語』に描かれたとおりだが、彼女はスクリプターであつたから、もともとふたりは映画を通じた仕事仲間でもあつた。彼女は故郷である岩手県雫石で小学校の教員をしていたと書かれている。それが家庭の事情か二人の妹弟を連れて一家は東京に出てくることになった。二人が所帯を持ったとき新藤27歳、孝子23歳であつた。太平洋戦争が始まる2年くらい前か。孝子が昭和18年に亡くなったとすると二人の結婚生活は4年ばかりのことになる。それも途中から孝子は病魔に蝕まれていき、何度も血を吐いてとうとう寝たきりのまま動くことのできない体になってしまふ。孝子は次第に痩せ細っていく。それでも新藤の仕事のことを氣にかけている。妻らしいことができず新藤に対し済まないと言ふような心づかいをしている様子がこの文章から伝わってくる。この時代結核は死病として恐れられた。悲惨ではあつたが新藤は妻を懸命に看病した。新藤は孝子の最期の言葉をはつきりと聞いている。「お世話になりました」そう云つた。

この時代に新藤は多くの映画人と運命的な出会いをしている。水谷浩や内田吐夢、そして生涯にわたつて師と呼ぶにふさわしい溝口健二などである。新藤兼人にとつて溝口健二は最初の頃は雲上のひとであつたろう。傍に寄ることすら難しかったに違いない。それが次第に近づくことが出来るようになって、とうとう自作のシナリオまで読んでくれるというところまでこぎつけた。しめたもうこつちのものだと自信満々で持参したシナリオを渡した。翌日また来てくれとのことだったので溝口家に行くと、自分の前に対坐した溝口が前日に渡した自分のシナリオをポンと投げ出すように置くとひと言「これはシナリオではありません、これはストーリーです、芝居がぜんぜん書けていない、こんなことじゃだめだね」とにべもない。これは後に新藤が何度も語っている有名な溝口とのエピソードのひとつである。溝口健二も58歳で亡くなったから若死にといえよう。

女優対決の『午後の遺言状』

『裸の島』のあと『人間』『母』『鬼婆』『悪党』『本能』『性の起源』『藪の中の黒猫』『かげろう』

『触角』と60年代はほぼ年1作のペースで作品を作りつづけるが、新藤の創作意欲がいちばん旺盛な季節だったのかもしれない。全部ではないがわたしもこれらの作品を観てはきた。しかし正直なところあまりピンと跳ね返ってくるものを感じなかったのも事実である。テーマ性の問題や作品の出来不出来も関係したのかもとも思うが。

しかし1970年に公開された『裸の十九歳』は強烈にこころに焼きついている。永山則夫を演じ、この時はまだ新人俳優の原田大二郎がすばらしかった。そして1975年には溝口健二の足跡をスクリーンで自らが辿るという『ある映画監督の生涯』が完成する。さらにその後撮った林隆三が高橋竹山を演じた『竹山ひとり旅』（1977）、これもよかった。

新藤兼人にとって生涯のパートナーであり、公私にわたつてお互いを支え合い、また新藤作品の大半に主役として出演した女優の乙羽信子は新藤作品『午後の遺言状』（1995）が最後の出演作となつた。この撮影中乙羽信子の状態は撮影が危ぶまれるほど危険なものであつたが、新藤とこれまで幾度となく修羅場をくぐつてき

た彼女の執念、その女優魂とでも呼ぶべきものが最後のカットまで彼女を持ちこたえさせた。

この映画は全体として決して重苦しいものではなく、一部に悲惨なものも描かれはするが後味はいいものである。しかし何とていってもこの映画の見どころは乙羽信子と杉村春子のガツプリ四つに組んだ重量級の対決である。杉村のツッコミに乙羽がサラツとかわすという絶妙の呼吸である。観ればわかるがふたりの会話がとても可笑しい。

『ドラマとはドキュメンタリー』

『ある映画監督の生涯』は溝口健二が死んだ直後から考えていたという。しかしそれから20年間手がつけられないまま過ぎた。これは始めから劇場公開するつもりはなかったのだ、費用はすべて新藤の個人負担だった。製作スタッフも新藤を入れて5人。なぜ5人かというとギリギリ1台の車に乗れる人数が5人だったからである。溝口と云えば田中絹代を絶対に外すわけにはいかない。まず彼女からはじめよう。それがうまくいかなかったらこの映画はあきらめる。そうした決意で臨んだ作品であっ

た。最晩年の溝口と田中絹代の関係は仕事上のことが原因で疎遠になっていた。しかし時間はかかったがとにかく映画は完成した。公開する用途の立っていない10万フイートにもおよぶこの映画のラッシュをATGの葛井欣士郎プロデューサーが観て、ATGでの公開が決まったという。しかし興行的には失敗だった。だがこの年のキネマ旬報が選んだ日本映画の第1位になった。

新藤兼人は云う「ドラマとはドキュメンタリーであり、ドキュメンタリーとはドラマである」「ドキュメンタリーも作家の目がまずあって、作家の意思によって対象が選択される。対象が人間であれば生きたドラマである。映画と演劇のちがいはここであって、映画はドラマとドキュメンタリーの同居からなっている」

「ドキュメンタリーでありながら、結果としてドラマに昇華するものを作る。これはドラマをドキュメンタリーとして撮った『裸の島』とまったく正反対の作業である」「『ある映画監督の生涯』について新藤はこのように述べている。

その昔太秦の撮影所の門を初め

てくぐったとき彼に与えられた仕事は現像場であった。今と違い当時はポジ現像したフィルムの銀（乳剤）を次々に水洗タンクに入れて洗い流していかなければならない。その後はドラムにフィルムを巻いて乾燥作業になる。ところがこれが難しく簡単ではない。すべての工程が手作業中心だからたいへんな重労働で、一日中立ちっぱなしだからしまいに便所で屈むこともできなくなつたと新藤は回想している。しかし後々思うところの一年間で学んだことがその後の映画生活で貴重なものとなったのである。

もしこれが自分にまったく合わない仕事であつたなら苦痛だろうが、たとえ乾燥場の仕事であっても、すくなくとも好きな映画の世界で生きられる自分は辛くもなんとかなつたのである。まだ若い新藤兼人には毎日が楽しかったのである。

さてわたしはまだ観ていない新藤兼人最後の作品となる『一枚のハガキ』を観に行くことにしよう。

反戦、反核、生と性 映画職人・新藤兼人が遺したもの (上)

今市文明

高校時に観た衝撃の作品『鬼婆』

今年5月29日朝、世界でも稀な100歳の現役映画監督・新藤兼人が逝った。90歳を過ぎてからは「これが最後」と言いつつ、なおも創作意欲は衰えず、何本も作品を撮り続けてきた監督であつただけに、本来は天寿を全うしたと言える年齢にもかかわらず、死の報道に接したとき意表をつかれた気持ちになつたものだ。

5年ほど前、お目にかかったことがあがる、そのときは自分で立つて歩かれていた。それが最近、テレビで拝見する姿は、いつも孫

の映画監督・新藤風さんに車椅子を押してもらう様子に変わっていた。それでも、この監督は不死身で映画を撮り続けるだろうと思わせる迫力が画面から伝わっていたものだ。だからこそ、彼の死は意外であり、じつに惜しいと思えたのだ。

彼はシナリオ作家から出発し、

40歳で映画監督になった人だが、この間、シナリオは250本以上、映画は49作を遺した。私はこの49本の映画のうち、およそ半数は観ているが、どれひとつとっても忘れたくない強烈な印象がある。それは、彼の作品のすべてが主張をストレートに表現したものだからだ。最近、「一体、この映画、何が言いたかったの？」と観終わって失望する映画があまりにも多い中、新藤作品だけはそんなことは全くない。メッセージ性が極めて強い作品ばかりなのだ。ここに私は惹かれて、これまで彼の作品は可能ながぎり観続けてきた。

しかし、彼の映画はすべて近代映画協会という独立プロの製作だ。配給先を持たないから、映画が公開されても単館上映か全国の地域映画鑑賞会による上映に頼るしかない。したがって、私も劇場で観

たのはたかだか数本で、大半がビデオやDVDで観たものだ。

私が新藤作品を初めて観たのは高校時代。『鬼婆』（1964年）というタイトルに興味を持って田舎の映画館で観た記憶がある。白黒作品だが、ギラギラした熱気や風の音、草原の臭いが感じられる作品だった。

世は南北朝時代。都に程近い芒ヶ原に息子を戦に取られた母とその嫁が住んでいる。戦で田畑を荒らされ、働き手の息子がいなくなつては生活が覚束ない。生きるために、2人は落武者を殺し、武器を剥ぎ取って売り、食糧の稗に替えるという生活を送っている。そこへ、息子と一緒に戦に駆り出された若者が1人で帰ってくる。息子は戦死したという。やがて、その若者と嫁とが男女の関係に。毎夜、嫁は芒ヶ原を突っ走って男のもとへ。それに嫉妬した義母は、鬼の面を被り、嫁の行く手を阻み妨害する。ところが、鬼の面が顔から外れなくなり……。最後はホラー映画を思わせるような展開で終わる。

この作品は、新藤監督52歳の作品だ。自身、著書の『いのちのレッスン』で「私の絶頂期の作品で

あり、私の代表作といえる作品だ」と述べている。この作品で、ほとんど半裸の状態で体当たりに演じた義母役の乙羽信子、嫁役の吉村実子はその年のブルーリボン主演女優賞などに輝いている。

この作品には、新藤監督の終生のテーマであった反戦、生と性の問題がすべて込められていると言っている。戦争が民の暮らしをいかに壊すか。そして、底辺の庶民が生きていくためのしぶとさ、したたかさ。そしてまた、生きることの根源にある性の問題。これらをギラギラした映像とエンターテインメント性を盛り込んで描き切った作品である。

『愛妻物語』で乙羽と出会う

新藤監督は、明治の末年（1912年）、広島市から山ひとつ越えた山間の農家に生まれた。生家は使用人を何人も使っていた大きな農家。12歳違う兄と姉2人の4人兄弟の末っ子で、小さい頃から母の愛を一身に受けて育った。

『鬼婆』は、子どもの頃、母の懷に抱かれて毎夜聞かされた怖い話からイメージした作品だそうだ。

父親が無類のお人好しで、他人の借金を肩代わりしたために家は

没落。上の姉がアメリカ移民の男性と結納金目当てに結婚したものの、あえなく一家離散の憂き目に兄は尾道で刑事に、すぐ上の姉はやはり尾道で看護師になったが、まだ幼かった新藤少年は母と知人の蔵を借りての2人暮らし。しかし、その最愛の母も新藤少年14歳のときに他界。この辺の話は、『落葉樹』（1986年）で自ら映画化している。

新藤少年は長兄のもとで学業に勤しむが、その中で映画界入りを志す。20歳で念願の映画界入りを果たしたものの、最初は美術部だった。そのうち、映画の基本はシナリオにあることに気づき、シナリオ作家をめざすことになる。が、ろくに勉強もしていない人間がシナリオをものにするというのは至難の技だ。書いても書いても採用されない日々が続く。時は太平洋戦争の真っ只中。そんな報われない貧しい時期に結婚したのが同じ映画の職場にいた最初の妻・久慈孝子である。

新藤が師と仰ぐ溝口健二監督に1本の自信作を書いて見せたところ、即座に「これはシナリオではありません。ストーリーです」とにべもなく一蹴され、挫折しそう

になったことも。幾度も挫けそうになったとき「あなたは一生シナリオ作家で生きるのよ。頑張って！」と励まし続けてくれたのが妻だった。それから1年、シエークスピアなど古今東西の戯曲を猛勉強し、ついに1本のシナリオが映画化されることとなった。が、その作品を観ることなく妻の孝子は結核で亡くなるのだった。

この妻との若き日の暮らしを描いたのが新藤の監督第1作となる『愛妻物語』（1951年）である。ここで新藤自身に扮したのが宇野重吉、妻の孝子に扮したのが、当時「100万ドルのえくぼ」の触れ込みで宝塚の娘役から大映がスカウトした乙羽信子であった。これが新藤と乙羽信子との運命的な出会いとなる。

敗色濃厚となった終戦間近の頃、新藤は33歳で召集される。一緒に召集された兵は100人。このうちくじ引きで60人が南方へ出征、艦船が撃沈されて全員が戦死、残る40人も内地の港で敵の砲撃に遭い、34人が戦死した。生き残ったのは新藤らわずか6人だったという。生き残った自分の義務は、生き続けて戦争の酷さを伝えることだと、このとき彼は固く心に誓っ

たそうだ。

この実体験を映画化したのが彼の最後の作品となる『一枚のハガキ』（2011年）である。戦争で跡取りを失った農家が次男を呼び戻して未亡人となった嫁と一緒にさせるも、その次男も召集され戦死。年老いた父は脳溢血で亡くなり、将来に絶望した母は自殺。それでもなお、懸命に農業に精を出そうとする嫁のところに、戦死した最初の夫の戦友が一枚のハガキを持って訪ねてくる……。

この作品は、戦争がひとつの平凡で慎ましい家庭を壊していく様を描いたものである。それまで撮り続けてきた数多くの作品の底流に確実にあった反戦思想を99歳の監督がダイレクトに表現した傑作である。

大竹しのぶ扮する嫁と2人の夫との濡れ場もきつちりと描かれており、なおかつ夫の戦友（豊川悦司）とたくましく農業を営んでいるこうとする希望に満ちたラストは、まさに新藤監督の生涯のテーマそのものであり、99歳にして枯れることを知らないみずみずしい作品であった。この年のキネマ旬報ベストテンのグランプリに輝いたのも当然である。

戦後、新藤は松竹の脚本部に移植する。プロとなった新藤のシナリオは、吉村公三郎監督の『安城家の舞踏会』、木下恵介監督の『お嬢さん乾杯！』など次々にヒットを生み出す。5年間で50本のシナリオを書くという売れっ子作家となった。返子に自宅を構え、見合いで二度目の結婚をし、2人の子どもにも恵まれる。

しかし、日本はアメリカ占領下で映画界にもレッドパージの嵐が忍び寄っていた。新藤は吉村公三郎監督とともに、その嵐を避け、自分たちが自由な映画づくりができるようにと独立プロの近代映画協会を設立。独立プロブームの先駆けとなった。その第1作となったのが『愛妻物語』だったのだ。この作品は大映との提携作品だったが、記念すべき新藤の初監督作品となった。すでに40歳になろうとしていた頃で、主演の乙羽信子はこのとき27歳だった。

乙羽は、それまで大映のアイドル的女優で演技以前のB級映画の常連だったことに不満を感じており、『愛妻物語』でシリアスな演技ができたことに大いに感激、大映を飛び出し、近代映協の新藤のもとに身を委ねる決意をした。こ

れ以来、乙羽は少し前に近代映協に参加していた殿山泰司とともに新藤作品の常連俳優となり、2人そろって以後の新藤作品のほとんどに出演することになる。

『愛妻物語』に続く近代映協の第2作目は『原爆の子』（1952年）である。新藤監督のもうひとつの終生のテーマは反核である。彼は、戦後、復員して故郷の広島に降り立ったときに目にした原爆投下直後の惨状が忘れられなかった。この現実をどうしても伝えなくてはという強い思いに駆られたという。その思いをこの作品にぶつけたのだ。

主演は乙羽信子。原爆で家族を失った保母の女性が瀬戸内海の小島で教師をしている。終戦から数年たった夏休み、故郷を訪れて彼女が見たものは。かつての保育園児は原爆症で明日をも知れぬ病床に伏し、原爆で父母を失い盲目の祖父に育てられている男の子、原爆の後遺症に悩ま続けたかつての同僚など、原爆のもたらした惨禍がいやというほど襲いかかってくるのだった。（以下次号に続く）

切なさとしみと

『容疑者Xの献身』

藤井陽子

堤真一の号泣シーンに釘づけ

テレビドラマ「ガリレオ」の劇場版。

「ガリレオ」、実は一度としてまともにドラマを観たことがない。

この映画版に関しては、テレビで映画予告を見た時に「献身」という言葉がやけに興味深かった記憶があるけれど、それだけ。ドラマを観てなかった分、映画も観たとは思わず、月日が流れた。

それからどれくらい経った頃だろう。たまたまテレビ放映していて、最後の堤真一の号泣シーンだけを目にして釘付けになった。堤

真一には全く興味ないけど、あの泣き方は凄い。この人、こんな演技をする人だったのか!?とびっくり。そして、不覚にも号泣シーンを見ただけで貰い泣きしそうな自分がいた。「この人(役)、何があつたんだ!? 何があつてこんな泣き方してるんだ!?!」

それ以来、なんとなく気になっていたところ、ようやくテレビで再放映。待ってましたとばかりに、テレビにかじりついてそれこそ約2時間釘づけだった。

なるほど、そういうことだったのか。

あの号泣の理由がよくわかった。そして私も号泣した。何度も。

石神。切ないなあ。悲しいなあ。うーん、切なさすぎる。どうしてくれよう、この巨大な切なさを。

そしてこれを「献身」と名付けたのは言い得て妙。本当、「献身」じゃなきゃ駄目だ。他の言葉じゃ駄目だ。納得。

映画は、天才数学者(堤真一演じる石神哲哉)vs天才物理学者(福山雅治演じる湯川学)となっているけど、もうこれは、堤真一と松雪泰子(後述)が素晴らしく

で、湯川(福山雅治)なんか正直どうでもよかったかもしれない。こうしてみると、松雪泰子の花岡靖子という役は、2010年のドラマ「mother」での母親役の助走のように思えます。

そして堤真一。この人は、こんな演技も出来たんですね。よく知らないけれど、とにかく石神哲哉役が素晴らしかったですよ。もう、「石神」にしか見えませんでした。日本の、東京のどこかで、石神さんは実在すると思えるくらい、ハマってました。

石神は、数学しか興味のない、数学だけやってればそれでいい、見た目全く冴えないアラフオー男で、のっそりしたペースで日々生きて、冬眠中の草食系の熊みたいで、常に眠そうにまどろんでいて、常に疲れていて、ぼそぼそ声で、まるで感情を持たないような人です。

そんな彼が、隣の部屋に越してきた花岡靖子に恋心を抱きます。そしてある日、ストーカー化した前夫の富樫が靖子の部屋に押し掛けてきて復縁を迫ったり、血の繋がらない娘の美里に汚いセリフを吐いたり大暴れ。仕方なく靖子が投げ与えた万札を手にしてと

りあえず部屋を出ようとした富樫に、まさかの美里(娘)の反撃。置物で後ろから思いきり頭を殴ってしまったからさあ大変。相当痛かったんでしょう、激怒した富樫は美里を殴る蹴るの暴挙に出ました。靖子はそれを止めようと必死に跳ね返されても果敢に飛び込み、ふとした瞬間にこたつのコードを富樫の首に食い込ませます。美里のアシストも手伝って、ロックオンされた富樫の首はどんどん締め付けられ、やがて息の根が止まります。正当防衛で必死だっただけの親子は、殺すつもりはありませんでした。でも結果殺してしまっ

た。隣の部屋で、ぐもった一部始終の物音と声を聞いていた石神は、すぐにのっそりと花岡親子の部屋を訪ねます。平静を装って「ゴキブリが出て騒いでしまった。もう大丈夫です」と弁解する靖子に、「殺したのはゴキブリじゃないんでしょう?」と石神。一瞬で観念した靖子は、静かに石神を部屋の中に入れます。

そして。河原で全裸の男の遺体が発見されます。男の顔は石で叩き潰されて判別不可能でした。手の指の指

紋もバーナーで焼かれています。しかし、乗り捨てられた自転車に残る指紋や免許証、持っていた宿泊先の鍵などから、すぐに遺体は富樫のものと断定されます。

が、実は……。

ここからは見えている私達も石神のトリックに巻き込まれます。

元妻・靖子はすぐに警察から事情聴取されますが、遺体の死亡推定時刻の12月2日のアリバイは完璧。犯人は靖子に違いはないはずなのに、完璧なアリバイのせいで警察はなかなか証拠をつかめません。

そこで頼みの綱・湯川の登場。

最初は事件に全く興味を示さなかった湯川だが、容疑者・靖子の隣人が石神と知るや否や、積極的に関わってきました。実は石神と湯川は大学時代の親友だったのです。しかも、天才・湯川が人生で

唯一天才と認めている相手。それが、天才数学者の石神なのです。

友達だからこそ気付ける石神の心境と変化。湯川はそれを敏感に感じ取り、事件の真犯人は石神ではないかと探り始めます。

(編集注IIこのあとトリックのねたばらしがあります。)

ここで一気にトリックのネタバレですが、実は、富樫と断定さ

れた遺体は全くの別人。石神がいつも勤務先の高校までに通るホームレスの居住地がありますが、石神は、その中の一人のホームレスを殺して、富樫の遺体と見せかける仕掛けを施したのです。遺体のすり替えトリックです。そのため、顔を潰したり指紋を焼いたりしました。

石神は、ホームレスの男性にお金を渡して「仕事を頼まれてくれないか」と持ちかけ、富樫の免許証と鍵を渡して、富樫が泊っていたホテルの部屋で1日過ごして貰い、毛髪や指紋を残して貰いました。待ち合わせた河原に石神が盗んだ自転車で来てもらい、そこで、花岡靖子宅のこたつのコードを使って後ろから絞殺します。そして服を焼いたり、顔を潰したり、指紋を焼いたり。

富樫の死体は、恐らく石神がバラバラにして海かどこかに捨てたのではないかという事でした。

富樫が死んだのは12月1日ですが、石神がホームレスを殺したのは12月2日。トリックにより、靖子には富樫が死んだ(と思わされていた)12月2日のアリバイばかりを聞く羽目になった警察(ちなみに新人の内海役の柴咲コウと、

上司役の北村一樹)でした。

警察が家に来る事や、アリバイの話し方、返事の仕方……など、すべて石神が花岡靖子に指示していました。通話記録にも気を遣って、いつも石神は公衆電話から靖子の携帯電話にかけていました。そして石神の言う通りに事は運びました。

もう一つ別のトリック

さて、観ている私達には、もう一つ別のトリックが仕掛けてありました。

靖子の経営するお弁当屋さんにある日現れた工藤という男性(ダンカン)。「靖子ちゃん、久しぶり! 元氣?」と笑顔を見せる工藤

は、靖子がホステス時代にお世話になった人で、靖子に好意を抱いています。その後頻繁に靖子と工藤は食事に行ったり出かけたりますが、それを追いかけ、ねつとりとした目で写真に収める一人の男がいました。

そして、工藤のもとに、2人のツーショット写真と共に「花岡靖子を幸せにできるのはお前のような男ではない、この私だ」的な手紙の入った封筒が送られてきました。それを工藤から見せられた靖

子は、すぐにこれが石神の仕業だと気付きパニックになります。パニックでは石神のナレーションで、「あなたがこの男と仲良くするといふのなら、それはとんでもない裏切り行為である。私があなたのためにどれだけの事をしたと思っているのだ」というジェラシーたつぷりのセリフが流れます。なるほど石神はいつの間にかストーカーになっちゃったのね、あわわ……と私達の大半は思った事でしよう。靖子はすっかり怯えて、石神の電話に出ようとしません。そんな母に怒った美里が無理矢理電話を取ります。諦めて電話に出た靖子に石神はこう言います。

「お宅の郵便受けに2通の手紙を入れておきました。白い封筒は、今後必要になるので保管して下さい。茶色の封筒は、読んだら必ず処分して下さい。……それから、私とあなたが連絡を取り合うのは、これが最後です」

靖子が驚くと同時に電話は切れました。

そして、警察に1本の電話が入ります。富樫事件の被疑者が自首してきたと。石神です。花岡靖子をかばったのではなく、富樫を殺したのは自分だと。



『容疑者Xの献身』福山雅治と柴崎コウ

石神の部屋からは犯行に使われたこたつのねじれコードが。そして壁には穴が開けられ盗聴器が。これで花岡靖子と連絡を取り合っていたと。「向こうで話していると見せかけて実は私に発信しているんです」とストーリーカーチックにほくそ笑む石神。

片や靖子は、聴取に來た警察に白い封筒を手渡します。工藤とのツーショット写真と、ナレーションで流れたストーリーカーチックなセリフがそのまま手紙になったものでした。

これでもう一つのトリックが解

けました。石神は、ストーリーカーを装って靖子に疑いの目が向けられないようにしたのです。

逮捕され、拘留所に赴く石神。夜、雑魚寝する拘留所の部屋の天井の無数の小さな穴を見上げて、石神は頭の中で数学の4色問題を解き始めます。点と点を結び、線を引き、図形を作り、それぞれに色を塗っていきます。「隣り同士が同じ色になつてはいけない」と眩きながら。

その時の石神を見て、涙がこぼれました。数学を解いている時の石神は、唯一、そして一番、楽しそうなのです。純粹無垢で、なんだか子供みたいな顔になります。この時の石神が拘留所で4色問題を解く事が何を意味するのか。私には、大切な、愛する人を守る為に、自分が出来る限りの頭脳とエネルギーを駆使して守る事が出来ているという、石神の満足と充実に溢れた穏やかな心を見ました。そしてこの時の天井の映像は、4色ごとに塗られた宇宙みたいになつてとてもきれいでした。

自分をどこまで犠牲にしても、そして他人の命を犠牲にしてまでも、守りたかった大切な存在。石神にとって花岡靖子は、石神の人

生で初めて、石神にとっての最大に価値のある存在だったのでしよう。

処分してくれと指示した茶色の封筒には、石神の花岡靖子に対する思いが綴られていました。初めて出会った瞬間からの、石神の深い思い。なので、靖子に対する好意から靖子をかばったという証拠になるこの手紙は、当然処分されなければなりません。

でも、石神が完べきな計画を遂行しようとするならば、あえて靖子にこの手紙で思いを伝える必要があつたのでしょうか。もし彼女がきちんと処分しなかったらどうするつもりだったのでしょうか。

……なんて神妙なツッコミはいらないですよね。手紙を読む石神のナレーションと共に、彼と靖子と娘・美里の回想シーンが映し出されると、常にやさぐれているはずの彼の中の、唯一きらきらとした大事なものに触れている気にもなりました。靖子と美里を思っている時の彼は、優しくて穏やかです。そんな石神を見てみると、明らかに間違つた事をした彼の事を一瞬も責める気にはなれないのです。人の道を外れているし、誰かの犠牲の上に誰かの幸せを築こうとし

た彼の行為は悪そのものです。しかし、そんなわかりきった事を断罪するよりも彼の純粹さを受け入れる方がいとも簡単で、彼を責めるのは至難の業だったので。

石神の、靖子に対するまさしく「献身」だったから。

人の心には疎かった石神

さて、石神は、靖子に自分の思いは伝えても、彼が富樫のすり替えに赤の他人のホームレスを殺した事は伝えていませんでした。それは、優しく慎ましい靖子の人間性を彼が知っていたからこそ、自分の為に殺人を犯したという事実を知った彼女が今以上に大きく心を乱し、一生罪悪感を抱えて生きていくことになることを確信したからではないでしょうか。愛する人を苦しめるわけにはいかない。愛する人に更なる罪悪感を背負わせるわけにはいかない。だから、この事実だけは絶対に靖子には知られてはいけなかったのです。抑えきれない思いと感謝を伝え、その上で、自分がした事が全部無駄になるからどうか自分の事は忘れて、そして罪悪感など絶対に持たずに幸せに生きていてほしいと、手紙の中で靖子に念押しする石神で

した。

愛する靖子の為に裁きを受ける事ができる恍惚感に浸る石神でしたが、ラストの号泣シーンに繋がると彼の絶望を一気に噴き出させたのが、湯川でした。湯川の頭の中では、石神がホームレス殺人を犯した事がわかってしまったのです(その部分ははしりますが)。そして、個人的な感情でもって、勝手に靖子に全てを話してしまったのです。

手錠をかけられ、恍惚感に満たされながら拘置所の中を歩く石神は、靖子が自分を呼ぶ声に一瞬わけが分からなくなります。観ていた私もびくりしました。靖子が、「どうして私なんかのために」、「石神さんごめんなさい」、「私も一緒に罪を償います」と石神に泣きながら訴えるのです。石神は、「どうして……? どうして……?」と言って崩れ落ちました。そして、号泣したのです。絶叫したのです。この瞬間までは、彼の計画は思い通りに進んでいて、靖子を守る幸福感で一杯だったのです。それが、一気に破壊されてしまったのです。一瞬で絶望感が彼を飲み込んだのです。

自分のしたことがすべて水の泡

になった。愛する人を守れなくなった。その両方の思いで、再び絶望を抱えてしまった石神でした。

再びの絶望。それは、彼が靖子と出会う直前まさに首を吊ろうとしていた事でわかりますが、彼は自分の人生に絶望していて、当たり前のように淡々と死のうとしていくような人間だったのです。それが、まさにその瞬間に靖子と美里に出会った(アパートの隣に引っ越してきた靖子親子が挨拶に訪れたのです)事で、死ぬのを諦めたのです。生きようと思ひ直したのです。

自分に生きる希望を与えてくれた、大きすぎる存在だった靖子と美里。靖子に対して、恋心とは別の、そんな大きな特別な思いが石神にはあったのでしょうか。だから、自分がどれだけ犠牲になっても構わなかったし、自分も他人も犠牲にしても靖子を救いたい一心だったと思うのです。そんな大事な特別な存在は、彼の人生の中で靖子が初めてで唯一だったからだと思うのです。

この映画の中で、石神は、絶望から始まり再び絶望で終わってしまったわけですが、彼の束の間の希望は、だからこそとてもなく

輝いて、とてつもなく濃厚で、それでいて結局はとてつもなく儚い泡沫だったと振り返って思います。

再び、冒頭部分の独り言を繰り返してしまふけれど……石神、切ないなあ。悲しいなあ。うーん、切なさすぎる。どうしてくれよう、この巨大な切なさを……。

何度思い出しても、石神に対しては切なさとしさがこみ上げます。

それと、ほんとに、湯川(福山雅治)がどうでもよすぎる脚本だったなあと(笑) 湯川と石神が同じ画面にいるのに、なんだか別々の映画に出てるみたいな、不思議な感覚でしたよ。役者としての魂の差だったんでしょうか。てか、「ガリレオ」とこの映画がそもそも雰囲気やタッチが全然違うものだったんですね。

ここで、いきなり&今更な補足ですが、4色問題について。

4色定理ともいいます。いかなる平面の地図も、隣接する領域が異なる色になるように塗るには4色あれば十分だという定理です。

「地図に描かれた各国のうち、境界線を共有する2国は必ず異なる色で塗り分けるもの」とすると、最低何色必要か」という問題を、1

878年、A・ケーレイがロンドン数学会の席上で提起したそうです。3色では不足、5色なら十分だと1890年に証明されましたが、4色ではどうかというのは難問でした。1976年、大型コンピュータで約4年間、のべ1000時間以上(1200時間)かけて証明されたという事です。

証明された4色問題を検証し続けていた石神。「あの答えは美しくない」と。石神には相当にこだわりがあったのでしょうか。天才ならではこのこだわりとも言えそうです、石神特有の性質だとも言えそうです。

そんな石神が、計画的に筋道を立てて遂行したこの映画での殺人トリックとシナリオですが、勝手に石神の殺人をバラした湯川の、友(石神)を思う強い気持ちと、それにより自首してきた靖子の、石神の認識以上の善良さには、石神は気付いていなかったようです。人の心ですね。数学にはとことんこだわった石神ですが、人の心にはイマイチ疎かったという事でし

ようか。

『デジャヴ』から『ミッション: 8 ミニッツ』へ

継承された現実から
超現実への飛翔

久保嘉之

過去を覗き見る機械

私はリドリー・スコット監督の信奉者である。その所為で、彼の弟であるトニー・スコット監督の作品も、いつとはなしに追いかけて観るようになった。兄が芸術家肌なのに比べ、弟はエンターテインメントに拘った、スタイリッシュな画作りを信条としている。中にはドキュメンタリータッチなものや、やや重いテーマなものもあるが、総体としてエンターテインメントがメインなので、私としては安心して気楽に観ていられる。それにクオリティの高い作品が多

いので、それが目下いたく気に入っている理由でもある。

またスタイリッシュといったが、確かに題材の選び方や、スピーディーなカット割りによる画面構成など、洒落て現代のニーズを先取りしている感さえあるのだが、それだけにとどまらず人間がしっかりと描き込まれている。だから観終えた後、手応えがある。

トニー・スコット監督は、デンゼル・ワシントンとよくコンビを組む。人間を描きたい、特に主人公の思想や喜怒哀楽の機微を表現したい、その思いがこの名優を起用する最たる理由だと推測するのだが、デンゼルもトニーの演出に絶対の信を置いているのだろう。

『デジャヴ』——これから取り上げるこの映画は、『クリムゾン・タイド』『マイ・ボディガード』に続き、二人がコンビを組んだ三本目の作品に当たる。のみならずこの後も『サブウェイ123 激突』『アンストッパブル』と、コンビによる作品が順調に生み出されている。よほど相性がいいとみえる。

冒頭、お祭り騒ぎでフェリーに乗り込む人たちの描写に始まり、ニューオリンズの埠頭を離れたフ

エリーが、突然爆発炎上するシーン。海中に投げ出される人や車。続く悲痛な面持ちで救助や捜索にあたる関係者のシークエンスは、流石と唸らせられるほどの迫力と臨場感に充ちている。乗員乗客五四三名が死亡。

A T F (アルコール・タバコ・火器・爆発物局) の捜査官であるダグ・カーリン (デンゼル・ワシントン) は、岸辺に打ち上げられた爆発物の残骸や橋桁に付着した残留物から、爆発が人為的なものであるのを看破。またリード保安官からもたらされた情報で、一見フェリーの爆破による被害者と思われながら、爆発前に亡くなっている女性クレア・クチヴァー (ポラ・パットン) の不審死体を捜査。この折ダグは、すでに死亡しているにも拘らず、クレアの美しさに心奪われる。彼女の車が爆発物の運搬に使用されたことも突き止めた彼は、それらすべてのデータを、同じく爆破事件の捜査をしているF B I のブライズワラー (ヴァル・キルマー) に引き渡す。捜査の手腕を見込まれたダグは、彼から思わぬ申し出を受ける。ブライズワラーが新たに配属された“時間が要の特殊部門”の一員に

ならないかというのである。その任務というのは、通常の捜査活動ではなく、アレグザンダー・デニール博士 (アダム・ゴールドバーグ) が開発したプログラムで、犯人を特定するというものであった。「白雪姫」と命名されたこのプログラムは、絶えずデータを送ってくる七個の衛星の内、四個を同一地域の見張りに使用することで、成立する。つまり複数の目撃者がいるのと同じ状態を、創り出せるのである。特定された領域内であれば、距離もアングルも自由自在だが、蓄積データを使い復元映像を創り出すために、四日半という時間がかかる。しかもひとつの映像を見ることの出来るチャンスは、一回こっきり。巻き戻しは出来ない。共犯の確認も不可能である。但し、もうお気づきだろう、この理論だと爆発が起きた時間から四日半後には、犯人が判ることになる。だがそれでは遅いのだ。

「四日半あれば国外逃亡もできるし、次のテロも起こせる」それらを阻止するためのプログラムなのである。

ストーリーミング (配信) が開始される。「何処を見る？」ブライズワラーの問い掛けに、ダグは、



『デジャヴ』デンゼル・ワシントン

「現時点で犯人の特徴が何ひとつ判らないのだから、フェリーを見て無駄だ。僅かでも可能性のあるのはクレアの家だ」。「白雪姫」は壁をも通り抜けた。イラク戦線の赤外線映像と同じで、衛星が三角測量で熱源を感知して映像化するのだという。

映し出されるクレアの映像に、ダグは次第に心惹かれていく。

そのうちダグは、奇妙なことに気付く。眼の前のクレアの映像は四日半前のものだ。だがクレアは、誰かに見られているようで気味が悪い、と云っている。ダグは画面の端にレーザ・ポインタの光を当てる。クレアが、フィールドを

突き抜けたその光を見たことで、彼は確信した。「白雪姫」は、サマー・スコープなどではない。過去を覗き見るマシンだ。——

お断りしておくが、この時点でそういうことが理論的に可能かどうかということは、もう私の中ではどうでもよくなっている。これ以上考えると、頭が痛くなりそうだから、以降はデニー博士の説明を鵜呑みにすることにする。

ダグの舌鋒鋭い詰問に、博士は洩々答える。すべては偶然の産物だった。国家偵察局の研究開発で、凝縮エネルギーを用いた望遠鏡の感度を改良していた際、そのエネルギーで時空にねじれ(ワープ)が生じてしまったのだという。アイシニュタイン・ローゼンの「橋」といわれる概念、即ちワームホールを、創り出してしまったのである。簡単に云うと、空間を折り畳む方法を発見したのである。空間を折り畳むと、離れた二点を瞬時に移動できるリンクができる。但し、有機体の移行は不可能、凡そ命と名のつくものの行き来はできない。人間は過去へは戻れない。もし過去へ戻ろうとすると、強力な電磁場に晒されることになり、ホーラー境界を通過すると、電

磁パルスが生機能を破壊してしまうという。心臓の鼓動も脳波も、停止してしまうのだ。

しかしながらダグには、一度くらい犯行前に犯人を挙げたいという、強い希求があった。

そしたらメモはどうだ。爆破を暗示するメモを、四日前の自分に送り付けたらどうなる。「過去は物理的に変えられない。現実起こったことは変えられないんだ」デニー博士は否定しながらも、ダグの気迫に負けた。

メモを送ることは出来た。だがそれを見たのはダグではなく、相棒のラリー・ミューティだった。

彼はフェリー乗り場で不審な男を発見し、拘束しようとするが、逆に撃たれてしまう。だがこれで犯人は判った。ダグは犯人の乗った車を追いかける(このカーチェイスだが、犯人の逃走経路が、特定された領域外だったため「白雪姫」では追跡できず、咄嗟の判断でダグが、領域外のデータを収集できるGoogleを装着して実際の道路を、しかも四日半前の車を見失わないように、現在只今追いかけるのである。Googleには四日半前の映像しか映らない。両眼を覆うと今の道や、走行する車輛が見え

ない。結局片眼にGoogle、もう一方の眼で現実の道路を確認しながらの運転になるのだが、このアンバランスな状態が観客の不安感を掻き立て、そこにスピードがブラスされて生じる危険度が、アドレナリンを分泌させるという、従来にないものに仕上がっている。まあ余談ですが、必見です)、顔をしっかりと認識する。

データを照合の結果、犯人の名はキャロル・オースタッド(ジム・カヴィーゼル)、偏執的な愛国者と判明。

すぐさま手配され、逮捕。——

これで事件は落着である。だが、ダグの気持ちはそれでは済まなかった。犯人の割り出しに大いに与りながら、その存在が公になると、捜査方法に疑念を持たれる惧れがあることから、死んだという事実さえ有耶無耶にされてしまいかねないクレアを、ダグは何とか助けたかった。

「クレアの死に、責任を感じる必要はない」プライズワラは云ってくれたが、ダグがクレアに抱く感情は、すでに好意以上のものに変わっていた。それにフェリーに乗っていた人たち。テロリストのおぞましくも身勝手な行為のた

めに、理不尽にも未来を断ち切られた人たち。彼らに死なねばならぬ理由は、何ひとつない。出来れば彼らも救いたい。「オースタッドが犯行に及ぶ前に、助け出したんだ！」

過去を変えられるかもしれない手段がなければ諦めるしかないが、方法がないわけではない。ダグはデニー博士に頼み込む。

「四日半前のダグが眼にするのは、現在の君の死体だというイメージしかない」そう云いながらも博士は引き受けた。

ここでふたつほど疑問が生じた。まあ私の脳裡に浮かぶくらいだから、貧弱な疑問である。乞うご容赦。――まずひとつめは、ダグが無事に四日半前の過去に辿り着いたとしたら、いったいどうなるのか？ 冗談めかして若い自分に挨拶してくるよと云っていたが、同じ時間軸にダグがふたり存在することになるわけで、ドッペルゲンガー発生しまくりの状態、混乱をきたすことこの上ないではないか。しかし幸いにも物語の展開の中で、この問題は見事に処理されていた。ふたつめは、もしダグの思惑通り、クレアやフェリーに乗船していた人たちを助け出すことが出来

たとしたら、つまり死んだ人たちが生き返るということであり、〈現実〉が大きく書き換えられてしまうことになる。理論的に可能かどうかということよりも、そうすると何でも有りということになり、作劇上の制約が、意味を成さなくなってしまうのではないか。はたして物語の構成上許されるのかどうか、危惧したのである。

少し整理してみよう。ダグが向かう四日半前の過去は、今現在の現実と連繫している。物理的に変えられない過去に干渉した場合、現実を起こったことは変えられない訳だから、加えられた変化は自然に修正されて、現時点での現実と連繫しようとする。もし修正が不可能な変化が加えられたとしたら――〈多元宇宙論〉によると、時間の概念としての流れは変えられるという。だが新しい支流が出来る、古い流れ即ち今のヴァージョンの現実、十中八九消滅してしまうことになる。つまり支流である現実、今現在の現実から大きく乖離した、超現実の世界へと移行していくのである。……とすると、死んだ人々を救出するということは、理論的にも物語的にも矛盾はないということ

になる。納得できたようでないような、でも取り敢えず疑問への、答えは出たということで――ダグは、体に「蘇生処置をしてくれ」と大書して、再び今現在の現実世界には戻ってこれないことを覚悟しつつ、超現実への分岐点である四日半前の病院へと飛び立つ。

だがダグは本当に理解していたのだろうか。過去に介入したがために、超現実の世界へ踏み込んでしまい、事件の様相が思わぬ方向へと変化してしまうことを。

脚本は、テリー・ロッシオに手伝って貰いながらの、ビル・マーシリー。よく出来ているし、練られている。彼は第一稿が上がった時、迷わずトニー・スコット監督のところへ持って行ったそうである。監督もちようど脂がのついていた時期、CGに頼らず実写に拘った、迫力あるシャープな映像で魅せてくれた。

パラレル・ワールド

『デジャヴ』から五年。まったくよく似た、リメイクといってもおかしくないほどの作品が公開された。というより、現実から超現実への飛翔を継承した作品、とい

ったほうが、より正確かもしれない。ダンカン・ジョーンズ監督による『ミッシェン…8ミニッツ』が、それ。

シカゴ行の通勤列車が何者かによって爆破され、乗客乗員全員が死亡という、痛ましい事件が起こる。しかも犯人は、より大規模な次の犯行を、予告しているのである。推定で二百万人という死傷者が出る惧れがある。何としても、食い止めなければならない(列車爆破のシーンは、CGのみで処理されている。それともかなりシンプルにだ。ダンカン監督、もつと実写とかも交えて、リアルに撮りたかったのではなからうか。予算の都合だろうが、本編が面白いだけに、勿体無いなという気がする)。この非常事態を、自ら研究している対テロ戦闘用プログラムを試す絶好の機会と捉えた、ネリス空軍基地所属のラトレッジ博士(ジェフリー・ライト)は、コリン・グッドウィン大尉(ベラ・ファルミガ)をオペレーターに、コルター・ステイブンス大尉(ジェイク・ギレンホール)をして、その任に就かせる。

プログラムの内容とは、量子力



『ミッション: 8 ミニッツ』ジェイク・ギレンホール

学のパラボリック理論(こういう理論が実在するのだろうか、寡聞にして私は知らない)に基づいたもので、人間の脳は死んだ後も僅かな時間磁場が活動を続けており、つまり神経回路は機能しているわけで、同時に脳内の短期の記憶装置に、終焉直前の八分間の記憶が残るといふ実験データを組み合わせ、パラレル・ワールドへのアクセスを可能にしたものであるという。正直訳が解らんといった気分ではあるが、早い話が死んだ人の脳内に入り込み、八分間だけ時間を変換させることができるという、プログラムなのである。もっと簡単にいうと、仮想現実の中で、

時計を八分間だけ巻き戻して先へ進むことが、何度か繰り返して行えるということである。従って、それが題名の由来となっている。

当然プログラムへの適合因子とあったものはある。性別や体の大きさ、それに神経回路の類似性など。列車の爆破で亡くなったショーン・フントレスという教員のそれが、ステイブンス大尉のものと、一番近かったという。——このあたり、物語上はステイブンス大尉は何度も、ショーンの最後の八分間に転送されるのだが、その都度それぞれの容貌に変化させるのではなく、意識は飽くまでステイブンスだということで、観客から見た登場人物は彼(ジェイク・ギレンホール)で統一されているので、混乱はない。というよりこの方法を探るにより、内容が凄く判り易くなっている。ステイブンス大尉の任務は、爆破犯を探し出すこと。即ち仮想現実の中で犯人を特定し、その情報に基づいて現実世界で捕縛して、次の犯行を未然に防ごうというのである。だが残された時間は、多くない。仮想現実の世界では、時計を何度も巻き戻すことはできても、現実には止めることすら適わない

からだ。それにステイブンス大尉自身にも、問題があった。彼は第十七空挺部隊のヘリのパイロットとして、今尚アフガニスタンで戦闘中という認識しか持つておらず、今回の任務については何ひとつ予備知識を授けられてなかったのである。適応しなければならぬ。それにも時間がかかる。

『デジャヴ』同様、犯人であるデレク・フロスト(マイケル・アードン)も、

「今の世の中は地獄だ。すべてを瓦礫に戻せば、人間はやり直せる」狂信的な動機を持つ、テロリストである。如何にしてその犯人を見つけ出すのか。サスペンスフルな展開も、確かにこの映画の見所のひとつだが、やはり同じく本来の流れはそれではない。

実は、ショーン・フントレスには、クリステイナ・ウォーレン(ミシェル・モナハン)という連れがあった。元々彼女はショーンに好意を持っていたのだが、何度も転送を繰り返す内に、ステイブンスも彼女を好きになってしまふのである。助けてあげたくて爆破される前に、彼女を列車から降ろす。まあ人情として当然である。だが現実には列車は爆破され、

乗員乗客全員が死亡しているわけだから、一人でも乗客を救ったというのには、飽く迄プログラム上のことであり、現実世界における連続性を乱すことは許されない、というより有り得ないことであつた。だが果たして本当に有り得ないと断言できるのか。

人を愛しく思う気持が楽しむ鍵

ここから先は、理論というより映像による説得力を発揮という、展開になる。実は転送される瞬間ごとに映し出される映像イメージが、毎回サブリミナル効果を狙ったかのごとく、全面鏡張りの球面体のモニメントと、クリステイナなのである。これが見事な伏線となっており、ラスト「見せたものがあるの」彼女に連れて行かれた先で、ステイブンス大尉共々、観客も納得させられてしまうという効果を上げている。

——ステイブンス大尉は何度も転送を繰り返す内、しかも過去へ送り直された後の出来事がその度毎に変化するのに示唆を受け、爆薬を見つけ出して解除し、犯人を捕らえて拘束し、更にプログラムが終了する八分が経過したその時に、生命維持装置を切ってもら

えれば、もうすべてが今のヴァー
ジョンの現実へ戻ることはなく、
仮想の即ち超現実の世界で、クリ
ステイナや列車の乗客乗員全員
を救うことが出来るだけでなく、
自分自身も生き直すことが出来る
のではないか、そう思うようになる。
る。

「きつとうまくいく！」彼は、
コリン・グッドウィン大尉の協力を
得て、全く未知といえる世界へ
移行して、新しい人生を作り出す
ために、跳ぶ。現実から超現実へ
の飛翔を目指して。果たして仮想
現実とは思惑り動き出す、のか？
——ねっ、よく似ているでしょ
う。デテールは、かなり異なっ
ている。だが基本的な部分、例えば

筆者の近況など①

鶴田聖Ⅱ昔、筒井康隆の文章（ペテ
イ・ブープ伝）を読んで以来、機会
があればペティさんをシネマ・ギャ
ラリーに登場させたい（アニメ・キ
ャラとしてではなく）と切に願っ
ておりました。今回こういうくりの
イラスト（4ページ）を登場させる
ことができて、うれしい限りです。
まあたとえば、プロ野球の豪腕投手
というイラストに、沢村（栄次）・金
田・江夏にまじって星飛雄馬が入っ
てるようなもので、ナンじゃこりや
あーと激怒される映画ファンの方も

偏執狂的な異常さを持つテロリス
トによって引き起こされた爆発に
よる、大量虐殺。主人公は、それ
ら理不尽にも死を選ばされてしま
った人たち、とりわけ愛する人を
助けたがために、戻れる当ての
ない過去へと飛び立つ。それも単
なる過去ではない。已むを得ず干
渉せざるを得ないがために、現実
世界から、大きく変貌させられる
ことを余儀なくされた、超現実の
過去である。このあたりは全く同
じといっても、いいくらいである。
唯一違っているのは、ステイプ
ンス大尉は、現ヴァージョンの現
実にハンデがあるため、超現実へ
の飛翔に、強い願いと希望を持っ
ている、それくらいである。

いらつしやるかと思いますが、描き
手の無知（恥？）に免じて寛恕のほ
どを……

中田好美Ⅱ東京おかしランドでアー
モンドチョコレートが作られていく
工程を見ました。目の前で作られた
出来立てのおかしを貰える喜びはた
まりませんでした。絶品なおかしに
やみつきになりそうです。今度は出
来立てのじゃがりこを食べてみたい
です。

脚本はベン・リブレイ。こうい
った換骨奪胎は大好き、大歓迎。
まずはお見事といっておこう。
さて『デジャヴ』と『ミッショ
ン…8ミニッツ』の類似性という
か、現実から超現実への飛翔を継
承した個所に就いては、縷々述べ
たとおりであるが、肝心な事を言
い忘れたので、ここで補足してお
きたい。繰り返しになるが、私の
頭脳は高尚ではない。かるがゆえ
に、作品の中で展開される小難し
い理論には、理解が及ばない。そ
れでもである。どちらの作品も、
展開に興味をそそられ、手に汗握
り、最後まで眼が離せないのだ。
ある意味、これも継承された部分
であるのかもしれない。つまりで

が、ハリウッド映画「インセプション」がほとんど理解出来ずスルー
しました。年なのかなあと多少焦って
います。

小泉敦Ⅱ今の住居に引っ越して7回
目の夏が来た。引っ越した時のダン
ボールが半分以上そのままで。先日
何とはなしに数えたらまだ40箱以上
もある。そうでなくとも狭い居住空
間なのにまったくどうしようもない。
70年代のことだが、友人がリヤカ
ー1台に蒲団や生活用具の一切合財
を積み、それを荒縄でくくり、あつ
という間に引っ越して行ったのがま
るで夢のような出来事に今となって
は思える。それも中野の繁華街であ

ある、作品の面白さを堪能するの
に予備知識、あるいは専門知識は
必要ない、ということなのだ。人
が人を愛しく思う気持ちを理解で
きれば、それで充分。間違いない
楽しんで戴けることを、請け合
います。

*

……またまた貧弱な疑問が浮か
んだ。『ミッシェン——』のラス
トシーンで、ステイブンス大尉
が送ったメールがグッドウィン大
尉に届くのだが、この時の彼女は
現実世界の過去の彼女なのだろう
か、それともステイブンスと同
じ超現実世界の彼女なのだろうか。
いくら考えても——まあ、どっち
でもいいか。

る。持たないことの身軽さだ。

今市文明Ⅱ1日おきの病院通いも、
はや7年に差しかかろうとしていま
すが、あちこちガタがきた体に鞭打
ちつつ、1日1日を大事にして生き
たいと思っています。最近、感動で
きる映画になかなか出会えないのが
残念でなりません。

藤井陽子Ⅱ毎朝7時半からスーパー
の店員。午後からはイラストの生活
がスタートして1年3ヵ月。とくに
この初夏は1ヵ月間にイラストの仕
事が7件というハードワークで睡眠
不足極まりなかったけど、やっぱり
イラストは楽しいっす。

なんじ
爾らの霊の眠る山

鈴木輝夫

「戦争に負けたら、男はみんなキンタマを抜かれ女はみんなインバイにさせられる」

今次の戦争、即ちあの東亜戦争の末期、誰の眼にも敗戦が濃厚であると感じられた時、斯くの如き噂が何処からか立ち上り、それは瞬く間に伝播して実しやかにささやかれ出し、決してそれだけを信じた訳ではなかったろうが、妙齢の娘を持つ親達の一部は、無理やり我が娘の緑の黒髪を短く刈り上げさせ、何とか男に化けさせようと企んだ。

この嗤う可き逸話を始めて知った時は二十前後の頃であつたと思

うのだが、当時の私は「無知なる大衆」を小馬鹿にしており、因つてその無知さ加減を「何と愚かな日本国民よ」と嘲笑つた。そうである。私はインテリ(!!)を目指そうとした小生意気な学生であつたのである。事、志とは大きく違い、インテリなどには当然として成れず、更には、大衆の巧まずみせる有無を言わせぬ健かさもなく、今や、何の取得もない口煩いそこらの唯のオッチャンである。

嗚呼、青雲の志、今、何処。私の嘆きは兎も角、肝心なのは先の「キンタマとインバイの話」である。あの敗戦から六十七年。あの時生まれた赤児は、最早、老人である。長い月日である。そこらの唯のオッチャンに成り果てた身には、大衆の嗤う可き逸話をあの時に小馬鹿にしたものであつたのだが、今や戦争に負けて六十七年、現今の日本の有り様の諸々を私なりに仔細に考察するに付け、あの「無知なる大衆のデマ話」は、意外や意外、存外に、正に存外に正鵠を射ていたと思わざるを得ない。米国の日本占領計画とその実行は周到極まりなき緻密さで練りに練り上げられ、日本をして、再び

絶対に米国に齒向かう事のなきように誘導する巧知にたけたものであつた。その事を殊更に非難はしない。どんな国家であれ、戦勝国であればそうにするであらう。問題は日本及び日本人自身にこそあるのだ。完膚なき敗北に因つて以後、日本は米国の完全なる乾分になつた。それをノンシヤランと喜ぶ人々も数多くいたし、現在でもその事を多とする連中も多い。「戦後民主主義万歳」である。それもある意味に於いて正しかろう。何も、戦前の日本が全き正義であつたと言う積りなどは更々ないし、取返しが付かない大きな間違いも犯した。関係なき話が少々長くなつた。

今から百余年前、男達は金玉を抜かれぬ為、女達は淫売にさせられない為、詰り、当時の日本国民は丸となつて戦う決意を固めていたのである。念の為に記すが金玉云々の話は、勿論、「精神的去勢」としての意味であるのだが、淫売の話はそれよりも些か複雑で少々込み入っているのだ。「世界最古の職業」(!!)と称されている淫売、即ち売春はその言葉通り世界のあらゆる国で大昔からあり、

我が国でも決してその例外ではあり得ず、時代時代に因つて様々な形があつたのであるが、どんな時でもその大半の因は貧困のなからしめる処であつた。

勿論、この時にも淫売は公然と認められていて数多の公娼がいたし、公には認められない所謂私娼達も数多くいた。だがその当時の極々一般的庶民の意識は、「若しこの戦に負ければ年頃の娘は皆淫売にさせられて仕舞う」と、半ば本心でそう思っていたのである。何せ、「御維新」から三十有余年しか経つておらず、庶民一般の方にはその国の名も俄羅斯と言つた方がびつたりとした感があつた。俄羅斯、即ちツァーリズムの露西亜である。日本帝国が帝政ロシアと戦端を開いたのは明治三十七年(一九〇四年)であつた。初っ端から唐突に「金玉と淫売」の話を書いたのには、実の処、少々理由があつた。金玉の方は兎も角、私はその淫売婦達の健気さの行動に感動を抱かざるを得ないので。後々記す。

昨年末、数年がかりで制作され、更には数年がかりで放送されたドラマシリーズの完結編が終了した。

NHK制作の『坂の上の雲』である。原作は言わずと知れた彼の司馬遼太郎。主演・準主演級俳優を惜しげもなく投入して大掛りな海外ロケまで敢行し、更には最先端なCGをふんだんに取り入れた結果か、視聴者達の評判は上々であった也に聞く。私の感想を一言で書けば、端役でしかないと思われる処にまで有名な俳優を使っている為か見るだけで疲れて仕舞い、ドラマそれ自体をじっくりと検証して鑑賞する事が出来ず、果して彼らのギャラを総計したら幾らになるかなどと、思わず、余計な事まで考えた。(尤も、NHKのギャラは安いとは言われているのだが……)

極論すれば、私はあのドラマの唯一人の登場人物の描き方だけに注目していたと言っても良い。それは主要な登場人物などではない。伊地知幸介。『坂の上の雲』ではこの伊地知を演じたのは村田雄浩であったが、村田はこの役を実に陰翳深く演じ、伊地知の置かれた立場、就中、その心中の苦渋を彼の厳つい貌に滲ませていた。出演シーンは極めて少なかったが、なかなかの好演であった。

あの映画の伊地知幸介の描き方

は、NHKのドラマよりもっと酷かった。あの映画で伊地知を演じたのは、名脇役の誉れも高い稲葉義男。稲葉の好演により、仲代達矢や丹波哲郎が一層際立ち、更には、もう一方の主役であるあおい輝彦のあわれさよりも引立ったのだ。流石、黒澤明の『七人の侍』の一人。あの映画では物語の核となる——伊地知幸介の存在の意味——を、憎々しげに且つ又淋しげに演じ切っていた。稲葉義男の演じた伊地知幸介なる男は、NHKの『坂の上の雲』(勿論原作でも)では汚名を着せられており、更に一般的には、『日露戦争史』に於いても不名誉極まりなき処に位置付けられている。勿論、あの映画でも。

あの映画とは、過去に日露戦争を描いた数多くの映画の中でも一、二を争う傑作、『二百三高地』の事である。監督・舛田利雄、脚本・笠原和夫、出演・仲代達矢、丹波哲郎、あおい輝彦、夏目雅子、新沼謙治、湯原昌幸、佐藤允、長谷川明男、そして三船敏郎。昭和五十五年公開の東映映画である。

旅順開城約成りて

敵の將軍ステッセル
乃木大将との会見の
所はいずこ水師營

庭に一本棗の木
弾丸あともいちじるく
くずれ残れる民屋に
今ぞ相見る二將軍

二年七カ月に渡って休職していた乃木希典中将が、第三軍司令官に親補せられたのは明治三十七年五月で、既に黒木為楨大将麾下の第一軍は朝鮮と中国の境の鴨緑江を渡河して戦闘をしていたし、奥保鞏大将麾下の第二軍は中国遼東半島の金州城南山でこれ又戦闘に入る直前であった。勿論、帝国海軍も海戦に明け暮れていた。第三軍司令官に任じられた乃木は大将に昇進したのだが、実にここから彼の最後のそして最大の艱難辛苦が始まるのであった。

『二百三高地』なる映画は、ロシア陸軍が世界一堅固であると豪語した、「旅順要塞」を攻撃する乃木大将麾下の第三軍の物語である。それ故、仲代達矢扮する第三軍司令官乃木希典大将や、その上部機関たる満州総軍の総参謀長の

任にある児玉源太郎大将など、軍首脳の動静を描くのは当然であるのだが、最前線で激闘する兵卒(明治期にはこの呼称が一般的であった)も、必然として描かなければドラマにはならない。最上部と最末端。大方の戦争映画などはこの二つを対比して描くのが常で、この『二百三高地』もそのルーティーンを踏んでいる。

日本の戦争映画、殊に大東亜戦争を描いた作品には、軍司令官、師団長、参謀らの現実を無視した極めて理不尽な作戦の為、只管只管、無駄死にして行く数多の兵隊が悲惨の極みとして描かれている事が多い。それだけ、先の戦争には愚劣な軍幹部が多かったのである。……その意味に於いてもこの作品、凡百の日本の戦争映画の手法を定石としているのだが、それにもかかわらず、『二百三高地』が卓抜した傑作となり得たのには、最末端の兵卒達の驚嘆するまでの造型の見事さであり、更には彼ら各々が場面場面で吐く台詞のリアルさである。

乃木大将はおごそかに
御めぐみ深き大君の

大みことのり伝うれば
彼かしこみ謝しまつる

昨日の敵は今日の友

語ることはもうちとけて

我はたたえつかの防備
かれは称えつわが武勇

最末端としての兵卒の造型。脚本を書いた笠原の腕はここで冴えに冴え渡っている。彼が作り上げた四人の兵卒と一人の最下級将校、笠原の人物造型の「筆の彫刻刀」

は、鋭利極まりなき不気味な切れ味を見せて冴え渡る。それらは、こんな人物設定にしたのだからこんな行動を取り、こんな台詞を吐く筈であろうとの必然を敢然として裏切り、観客達の想像出来ない、——リアルとは真逆様のリアルさ——を、思わずの内に表出している。真逆様のリアルさとは奇妙な表現だが、そう書くしか他に言葉がないのだ……。

映画のスポットライトは、第三軍隷下・金沢第九師団第六旅団第七連隊の一人の最下級将校と、やがてその直接の部下になる四人の補充兵卒とに当てられる。正に彼らは、急遽、召集を受けた者達ばかり。ロシア文学をこよなく愛してロシア語も堪能なインテリ小学校教師、あおい輝彦扮する小賀予備少尉。豆腐屋の店員で、大酒飲みの父、結核を患う兄、精神障害のある弟、女郎に売られた姉を持つ、極貧家庭育ちの新沼謙治扮する木下二等卒。俱利伽羅紋紋（入れ墨の事）のヤクザ者で、酒が元の喧嘩で警察に逮捕され、巡査から留置場で召集令状を受け取る佐藤允扮する牛渡二等卒。

召集される直前に女房を亡くし、幼い二人の子を止むなく檀家に預け、後ろ髪引かれる思いで出征する友禅染の職人、長谷川明男扮する米川二等卒。金沢の東山の遊郭で、毎夜浮かれ三昧で客の御機嫌を取り持つ幫間（太鼓持）をしている、湯原昌幸扮する梅谷二等卒。笠原が造型したこの五人の男達の位置付けが素晴らしく、各々が引き摺らざるを得ないシヤバでの因果と、理不尽極まりなき軍隊での相克とが、奇妙なおかしさと皮肉的な悲しさを孕んで描かれる。それは取りも直さず、当時の日本に於けるあらゆる意味での貧弱・貧困の現れであり、明治期の弱小国・家日本の偽らざる真の姿であった。国家の歳入、ロシア二十億円、日

本二億五千万円。常備兵力、ロシア三百万人、日本二十万人。それでも、日本は戦う道を選択したのである。

かたち正して言い出でぬ

『此の方面の戦闘に』

二子を失い給いつる

閣下の心如何にぞ』と

『一人の我が子それぞれに』

死所を得たるを喜べり

これぞ武門の面目』と

大将答力あり

乃木大将の第三軍（主力は歩兵三箇師団。他には各砲兵隊）は、旅順要塞の各堡壘・砲台を攻めに攻め抜いた。各師団・旅団・連隊の先頭に立つ中隊長や小隊長などの下級将校は勿論の事、後に続く兵卒達の大多数は、成す術なく雲散と降りくる敵弾に見る見る死傷して仕舞う——。帝国陸軍開闢以來始めてと言つてよい近代的要塞攻めは、無惨極まる惨憺たる最悪の結果をもたらし、朝野を挙げての乃木に対する非難の声は納まる処を知らず、国民の多くが、我が

忠良なる兵卒達をむざむざ犬死にさせる軍司令官に、ごうごうたる罵声を浴びせた。

勿論、映画では満州総軍総参謀長の児玉大将、第三軍司令官の乃木大将、その幕僚たる参謀達、隷下師団の師団長、その下の旅団長などの高級軍人らの動向も、一級史料である『機密日露戦史』や、『明治卅七八年日露戦史』などを参考として精緻に描いているのだが、尤も心を動かされて感じ入ったのは、小賀予備少尉を始めとした彼が率いる小隊の四人の補充兵やその分隊の兵卒達の激闘と、その時々吐く彼らの思わずの言葉の数々である。そこにこそ脚本家笠原和夫の真骨頂があるのだ。ヤクザである牛渡は留置場で召集令状を手渡され、このように楯突く。「ワシあ戦争なんぞ行きたかないわい……」

巡査の「天皇陛下様の御命令やぞ」と言うたしなめにも、ふんどし姿のケツをのろろと掻きながら、斯くの如くうそぶく。

「天皇陛下？ ワシあそんな男、会ふたこともないやさかい知らんつ」

憲兵隊からの通報で、小賀がロシア語に堪能である事を知った中

隊長は彼に向かってこう尋ねる。「貴様、ロシアと言う国をどう思うか」と。小賀は斯く答える。

「敬愛しております」

その小賀の答えに、「率直で宜しい」と頷き、更には、「俺だつて、トルストイぐらいは読んでるよ」と微笑んだのである。新兵の四人を鬼かと思うような底意地の悪さで、情け容赦なく徹底的に鍛え上げた彼らの分隊長金山伍長。総攻撃の命令がかかる直前の塹壕の中、二人の幼い子に後ろ髪を引かれる思いの米川二等卒に向かつて。

「おい米川、お前だけは死ぬなや。絶対に死ぬなや……絶対に死ぬなや。弾の当たらん処におれや、何としてもお前だけは生きて内地に帰るんや。いいみんな、米川を絶対殺すんやないぞ」

思わず頷く全分隊の兵卒達。そして、金山伍長は壮烈な戦死を遂げるのである。この金山伍長を好演したのは誰であろう三南道郎。若い人には何者なのか判らないであろうが……。無理もない。彼は芸名を少し改名していた。前の名は南道郎。そう書けば映画好きの年配者には、はあーとくるであろう。『二等兵物語』シリーズ(古

い!)などで、新兵達を徹底的に苛め抜く下士官役が彼の当り役であった。『二百三高地』での好演は、それが生きたのである。

約五万の兵を投入した第一次総攻撃は、旅順要塞各堡塁に巧みに配された大小火器や、高圧電流が流れる鉄条網や地雷原、逆茂木を密かに配した深い壕に阻まれ、実に一万五千人もの死傷者を出して無惨に失敗した。

両将昼食共にして
なおもつきせぬ物語

『我に愛する良馬あり
今日の記念に献ずべし』

『厚意謝するに余りあり
軍のおきてに従いて
他日我が手に受領せば
ながくにいたわり養わん』

第一次総攻撃に失敗した第三軍司令部は、敵陣地近くまで壕を掘り進め、堡塁直下に大量の爆薬を仕掛ける築城攻撃へと変更し、更には急遽、日本最強力の二十八センチ榴弾砲十八門を持ち込んだ。中隊長の寺島は重傷を負って内地

に転送、中尉に昇進した小賀はその後中隊長になった。

満州総軍は、特に総参謀長の児玉は、一刻も早く旅順要塞を墮しにくれと第三軍に督促する。その児玉の督促に、伊地知幸介は満面の怒りを覚えていた。そう、先に書いた稲葉義男扮するあの伊地知である。彼が前から必死になって総軍司令部に要求していた弾薬・弾丸、更には攻城資材や食料、防寒着などは、何時如何なる時でも満足に送られてきた事などなかった。伊地知幸介は第三軍の参謀長の職にあった。伊地知少将はフランスに留学して砲術を学んだ砲兵戦術の専門家で、何程の弾薬・砲弾があれば旅順要塞を墜せるか綿密に計算していた。

私は伊地知少将に同情する。弱小国日本のこれが現実であった。総てが不足していた。『坂の上の雲』や『二百三高地』では描かれてはいないが、伊地知幸介は作戦の首尾を問われ、日露戦争の後、閑職の旅順要塞司令部に左遷されている。日露戦争では——軍神——や数多くの英雄が誕生したが(或いは、わざと誕生させた)、伊地知少将は数少ない不名誉な軍人として指弾されたのである。攻撃

方法を変えても墮せなかった。第二次総攻撃失敗。両軍睨み合いの膠着。映画はそこに考えられないようなエピソードを入れる。

極寒の中、資材を運んでいた牛渡は、切らせた煙草に苛立ちが募っていた。と、後ろから声をかける者がいる。振り返って眼に入っただのは、一人馬に乗る乃木大将。(実際、乃木は幕僚達を連れず唯一騎、前線を経巡ったと言われている。丸で、自ら死に場所を求めるかのように……)その時の軍司令官乃木大将と俱利伽羅紋の二等卒の会話。

「寒いじゃろう。からだ大丈夫か?」

「どうせワシらあ消耗品ですさかいに、こんぐらいの寒さあ……」
煙草を一箱ごと貰った牛渡はふつと気が付き、去り行く馬上の大将に叫ぶ。

「あのう、あのう……ワシやあ口下手ですさかいに、今言うたことあつ……」

馬上の乃木は振り返って大きく頷き、一鞭くれて見る見る遠ざかって行く。最上級の軍司令官閣下と最下級の二等兵卒。現実にはこんな事はないであろうが、明治のあの時代、そして名手笠原の手に

かかると、何故か現実じみて見えて仕舞う。明治天皇（三船敏郎）の特別の御裁可に因って旭川第七師団を増派された第三軍は、今度こそはの決意の元、第三次総攻撃を開始した。流石の乃木も正面突破は半ば諦め、敵陣の最も西方のやや弱いと思われる小山に主力を投入した。その名こそ——二百三高地——。

その小山の標高が二百三メートルであつたので、日本軍はその地を二百三高地と呼び習わしていたのだ。が、予想していたより堅陣で容易には墮せなかった。彼我の攻防は一段と激しさを増し、又もや膠着状態が続いた。そんな中でのある日の夜。次に書くエピソードは、恐らく、笠原和夫がこの映画の中で一番書きたかつた事である。敢えて言わば、このシーン

があるからこそ、この台詞があるからこそ、『二百三高地』が大傑作たり得た。第三軍司令部のある幕舎の中、一人の参謀に因って捕虜になったロシア軍将校の尋問が行われていた。一般に当時の日本軍は国際条約を守り、捕虜を鄭重に扱った。

その時事件が。日本人及び日本軍を小馬鹿にした捕虜に、小賀が

行き成り拳銃を抜き放ち、有無を言わず銃撃をし、命にかかわる重傷を負わせたのである——。騒ぎを聞き付けた他の参謀連中も血相を変えて集まる。その時の小賀中尉の台詞。

「部下の敵討（かたどり）でありますつ。ロシア人は総て敵であります。自分は悔いることは毛頭ありませんつ」

この遣り取りが耳に入つた乃木一人で執務していた自分のテントを出、少し離れた処で彼ら一団をじつと見詰める。それを意識した小賀が、更なる強烈な言葉を叩き付ける。

「最前線の兵には、体面も規約もありません。あるものは、生きるか死ぬか、それだけです……兵たちは……死んでゆく兵たちには、国家も軍司令官も命令も軍紀も、そんなものは一切無縁です。焦熱地獄の底で鬼となつて焼かれてゆく苦痛があるだけが……その苦痛を……部下たちの苦痛を……乃木式の軍人精神で救えますか！」

一人の参謀が怒鳴るようにたしなめる。

「乃木式とはなにかっ！ 閣下も御令息を失つておられるんだぞ

！」

それにも更に傲然として答える小賀中尉。

「当然であります！ 前線に立つ者が死ぬ運命にあるのは当然だと申し上げているのです！ それなのに、部下や御令息を死地に駆り立てながら、敵兵に対して人道を守れと命ずる軍司令官閣下のお考えは、自分には理解出来ません！」

ロシア語の研鑽を重ね、ロシア文学を愛し、ロシア国を敬愛していた小学校訓導小賀の姿は、最早、恐ろしい程微塵もなかった——。

直接の部下を始めとして、余りに多くの兵達の無惨な死に、あの誠実にして心優しい教師は——夜叉（やしゃ）——に変わつて仕舞つた。

満州総軍総参謀長児玉大将の、統帥（たうし）（簡単に言わば軍の命令系統の事）を逸脱したかに見える乃木大将への献策に因り、さしもの二百三高地も辛くも墮ちた。小賀中尉は二百三高地が墮ちる直前、「夜叉」のまま、無惨極まる戦死をし、部下だったあの四名の補充兵達も生き残つたのは、ヤクザの牛渡と豆腐屋の小僧の木下だけだった。そして金沢第九師団第七連隊の将校・兵卒達は驚く程の死傷

者を出し、全滅した小隊、中隊、大隊は数多に及んだのである。墮した二百三高地に観測点を設け、そこから一望出来る旅順湾に籠る艦隊を、二十八サンチ砲で正確に撃つて壊滅させた。斯くて、二百三高地は——帝国日本の聖地——となつた。

『さらば』と握手ねんごろに別れて行くや右左砲音絶えし砲台にひらめき立てり日の御旗

果して、乃木大将は愚将であつたのか？ 小説『坂の上の雲』を書いた司馬も、映画『二百三高地』を書いた笠原も、共に愚将論に立っている。

大東亜戦争後はその声が圧倒的に多い。

明治期、大正期、戦前の昭和期、更には戦後期と、各時に於ける〔乃木大将論〕を辿りたかつたが、残念ながら紙幅がそれを許さない。短く短く記す。——乃木希典なる一軍人の生き様——には、日本人一般の琴線に触るる何物かが、確かとして宿つていたのである。誤

解を承知で書けば、——日本人は乃木希典なる人物が好き——なのである。乃木は二百三高地を巡る兵達の激闘を漢詩にしている。

爾靈山嶮難攀
男子功名期克艱
鐵血覆山山形改
萬人齊仰爾靈山

読み下してみる。

爾靈山の嶮に攀じ難からんや
男子功名、克艱を期す
鐵血山を覆いて山形改まる
萬人齊しく仰ぐ爾靈山

二百三高地を爾靈山と詠んだ処に、乃木希典の万感の思いを感じて。即ち、爾らの靈の眠る山——である。映画ではその事には触れはしない。猶、小見出し変わりに使った、佐々木信綱・作詞、岡野貞一・作曲の『水師營の会見』は当時の有名な小学唱歌であるが、笠原に因ると、そのような——武士道と騎士道——と言った風情はなく、『水師營の会見』も極めて事務的であつたと鮑膠もない……。

冒頭に記した淫売の話である。

小説『坂の上の雲』でも日本へと回航されるロシア・バルチック艦隊（日本海海戦で、東郷平八郎麾下の聯合艦隊に因り、大方壊滅させられた例のあのロシア最強艦隊）の動静を、故国へと知らせる（これも事実あつた）——からゆきさん——、即ち、東南アジアに出稼ぎ或いは売られて行つた売春婦達の健気さを描いているが、この小論を書く為に改めて日露戦争の最新の資料を漁っていたら、驚く可き発見をした。何とあのマダガスカル島、アフリカ大陸の東にある日本から気が遠くなる程遠いマダガスカル島にも同じような事をしようとした日本人娼婦達がいだらしいのだ——。最早、歴史の波間に消え、その時の詳細までは定かには判らない。名もなき市井の悲しき女達。御国を思う見事な——烈女達——である。彼女らを裏切つた筈の祖国へのこの健気さ——。果して彼女らを、——名もなき淫売——などと、言えるのであるうか……。

完

筆者の近況など②

N子(岩館範子) 最近近はものづくりしてます。万華鏡と箱型ののぞき箱で、ずっと挑戦したかったのですがやっと実現しました。中が鏡になっててそれに映つた絵を見て楽しむというものです。絵を描くのがなかなか難しく苦労してます。でも、映画はちゃんと観てます。お気に入り、『宇宙人ボール』と『アタック・ザ・ブロック』ですね。

N雄(門馬徳行) 先日、『ユナイテッド・ミューン』の悲劇——を観たが、90名弱の席に入っていたのは僅か5名。ウィークデーのせいもあると思うが、これは決して名門サッカー・クラブ、マンチェスター・ユナイテッドの宣伝映画ではなく、事実に基づいた話で悲劇に屈しない人たちの戦いぶりを描いた作品。折り目正しいイギリス映画らしい雰囲気、漂わせ文句のない仕上がり。だから、ぜひ、多くの人々に観てほしいと思う。

久保嘉之 毎日飲んでる七種類の薬が、思いのほか効いて、とても疲れやすい日々を過ごしています。仕事もつとめて定時であるようにしています。ひとつの病気の発作（心筋梗塞）が、こんないろいろな波紋を拡げるとは。反省しきりです。（次号で「心筋梗塞、顛末の記」をまとめます。）
関田孝正 昨年の12月、けんぼ協会から保健師さんがやってきた。健康診断の結果から、血糖値、尿酸値、体脂肪率が正常値より高めであり、このままの生活を続けると糖尿病に

なる、ついでには食生活等の改善を奨めるというアドバイスを受けた。その時点で体重は76キロ（163センチ）あつた。改善点は、次の3点。
①夕食の蛋白質は1品に②夕ごはん50グラム減③ウォーキング週5回。そのほか、昼食の麺類は汁を残す（塩分摂取減、夜の缶ビールは500ミリリットルから350に（肝臓の負担減）——ということであつた。数値を改善させるには減量しかない。食事と運動がポイント。体脂肪率は運動で下げることができ。ウォーキングは1万歩が理想だということで、毎日歩くようにした。千歩約10分。東京に出かけるとき以外は、主に家の近くの運河土手を昼食後に歩いている。食事は低カロリーの野菜を多く摂り、蛋白質1品というのが難しいのだが、なるべくそうした。肉など摂取量を少なくするようにした。夜のごはんはやめた。ビールは唯一の楽しみで、これは減らせないと思っていたが、ノンアルコールがビール代わりにすることを知り、思い切つて350ミリ缶に切り替えた。けっこうビールの代替になった。半年間やってみて、体重は69キロになった。今年の健康診断では、数値はどれも改善した。保健師さんの言うことに間違いはなかった。今も毎日のウォーキングは、だいたい続けている。ビールはアルコール入りに戻ったが、350ミリ。その後、体重は減りもしないが増えもしない。年内になんとか65キロまでもっていきたいと思つている。この間、床屋のおばさんから「やせて、いい男になったよ」と言われてニンマリ。

登場人物個々の過去があぶり出される面白さ

面白い映画の条件は何か。なかなか簡単には分析できないのだが、ストーリー、登場人物のキャラクターに深みがある、ということは言えるだろう。

この映画(ピーター・チャン監督)は、そんな映画のひとつだ。

起承転結でストーリー展開をみている。

起||穏やかな農村で、紙漉き職人の男(ドニー・イエン)は家庭をもつて幸せに暮らしている。武術の心得のある二人組の強盗が質屋に押し入る。そこにたまたまいた紙漉き職人が男たちを結果的にやつつけてしまう。二人とも死亡。

承||事件の調査に役人(金城武)がやってくる。役人は強盗を殺した行為は偶然などではなく、男はただものではないとみて、過去を洗い始める。

転||男の過去が暴かれる時がある。男は何者かに命を狙われている。役人も男と一緒に死闘に巻き込まれる。

捜査官X

▼金城武(左)とドニー・イエン



庭は吹っ飛んでしまう。もう元には戻れないのではないかと思わせる。封印していたものを解き

結||争いに決着がついて……。

転の部分がつまみ。20世紀初頭の中国。過去を封印して生きてきた男。ある日、その正体をさらけ出さなくてはならなくなる。ぎりぎりまで市井の徒としての姿をつづけるが、挑発され、妻や子供の前で本当の姿をさらさざるを得なくなってしまう。男はあろうこと

放してしまう開放感。自らの隠し事をすべてさらけだしてしまったという開放感たっぷりの映像がそのあと展開する! ドニー・イエンは最近では、「フリスト・オブ・レジェンド/怒りの鉄拳」で機関銃を乱射するドイツ軍にアクロバティックな壮絶な戦いを肉体だけで挑んだ男を演じた。彼のカンフースターとしての本領がここで発揮される。苦悩に満ちた目が強く印象に残る。

血で血を洗う、今の世界でも各地で起こっている民族紛争の一方の当事者の顔が現れるのだ。中国国内にも近現代史でそういう歴史があったようだ。とにかく広い国だ。男は異民族間の争いから足を洗おうとするのだが、一族はそれを許さない。一族同士のなかで裏切り者の烙印を押され、命を狙われている。自分の親からもだ。

過去が暴かれるのはその男ばかりではない。役人にも過去があった。男がただの職人ではないと思いつめると、男の過去を洗おうとしつこいくらいに食らいついて離れない。なぜにそんなに疑い深い人間になってしまったのか。ある事件で情けをかけた取調べをしたばかりに危うく一命を落としか

けたことがあったのだ。さらに、法律を守るあまりに義父を自殺に追いやってしまうという過去を背負っている。妻は今もつてそのことを許していない。さらに、一命を落としかけてその治療のために始めた鍼灸が捜査に役立つようになるのだが、究極の戦いのなかでその技が思わぬ力を発揮することになる。

男の妻にも過去がある。二人の子供のうち、一人は今の亭主との間にできた子供だが、もう一人は前夫との間にできた子供だ。前夫はある日、忽然と蒸発してしまっただのである。新しい亭主にはどんなことがあっても家にいてもらわなくては困るのだ。いちいち過去を詮索して居づらくなるようなまねはできない。

それぞれの過去があぶり出されていく。

過去は過去、それを知ったうえで未来をめざせということか。幸せな平凡な生活を得るためには、戦いも必要ということか。人間として許せない行為とはとことん遠ざかれということか。そんなたくさんさんの思いが交錯する、ミステリータッチのカンフーアクション映画の傑作だ。

(関田孝正)